HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第7章　サーミ学校関係者の教育意識
Author(s)	野崎, 剛毅; 新藤, 慶; 新藤, こずえ
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 29, 105-145
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52406
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_29_7.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7章　サーミ学校関係者の教育意識

野崎　剛毅｜國學院大学北海道短期大学部准教授
新藤　　慶｜群馬大学教育学部准教授
新藤こずえ｜立正大学社会福祉学部講師

本章では、スウェーデンにおけるサーミ学校教師、保護者およびサーミ工芸学校教師、学生に対しておこなった調査から、彼らのサーミ教育に対する意識を明らかにしていく。第１節ではスウェーデンの学校制度とサーミ教育の実態を確認する。続いて、キルナとヨックモックのサーミ学校でおこなった調査から、第２節ではサーミ学校教師の教育意識を、第３節ではサーミ学校利用者の保護者の教育意識を確認したい。さらに、サーミ工芸学校でおこなった調査から、第４節で教員の教育意識、第５節で学生の意識について検討する。

第１節　スウェーデンにおけるサーミ教育の概況

第１項　スウェーデンの学校制度

図７－１－１の学校系統図にみられるように、スウェーデンの学校教育制度はきわめて単純な単線型をとっている。それぞれの学校の根拠となる法律は大きく３種類に分類される（二文字 2011: 12-3)。１つ目は「学校教育法」である。その第１条では「６歳児学級、基礎学校、高等学校、ならびにそれらと同等レベルの学校形態、すなわち知的障害児のための養護学校、特殊学校、サーミ学校」[1)]がこの法の対象となることが謳われている。２つ目は「高等教育法」である。これは大学を中心とした高等教育を対象とする。３つ目は「第三の教育制度」と呼ばれる民衆教育に関わるもので、国や地方公共団体などによって組織される各種学習サークルや国民大学などがこれにあたる。

義務教育は９年間であり、基礎学校がこれにあたる。基礎学校はさらに３年ずつ、初級学年、中級学年、上級学年にわかれており、このうち初級学年と中級学年が初等教育、すなわち日本における小学校にあたる。上級学年は前期中等教育、つまり中学校である。基礎学校を卒業すると、ほとんどの生徒は総合制高等学校へと進学する。総合制高等学校を卒業するとその上には大学や専門的職業教育学校などが設置されている。だが、日本と異なり、進学を希望する生徒がすぐに大学へいくわけではなく、多くの生徒は高等学校卒業後に１年かそれ以上の「サバティカル期間」を設けるという。その間に旅行をしたり、別の学校へ行ったり、働いたりすることで見識を深め、そのうえで高等教育機関へと進学することになる。

二文字理明はスウェーデンの教育制度の特色として、「多様性とリカレント教育体制の堅持」「共存・共生の教育の普及」「教育の無償性の貫徹」などを挙げている（二文字 2011: 15-8)。リカレント教育は、「成人教育」や先にふれたサバティカル期間などに象徴される。一度働き、その後必要に応じて資格などを取得するために学校へ戻るということはスウェーデンにおいて一般的になされていることである。また、教育の無償性については、すべての学校段階において、その授業料のみならず「現代の教育ではあたりまえとされている教科書、筆記用具その他の文房具」(学校教育法第

４章第４条他）や学校給食（同第４章第４条a他）、さらには通学にかかる費用までが無償となっている。

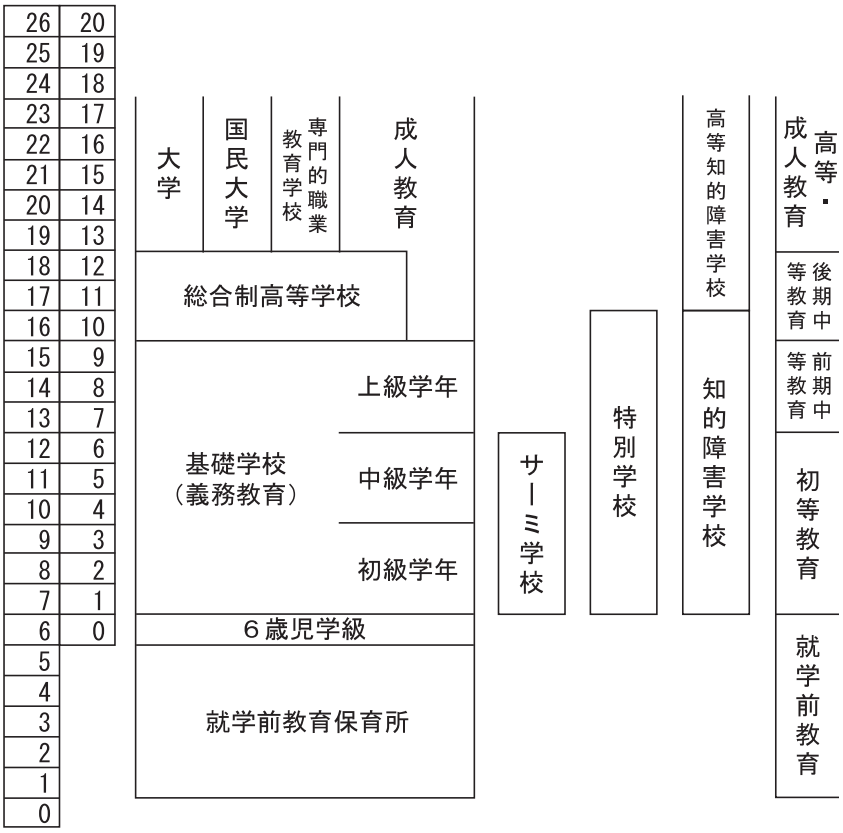


図７－１－１　スウェーデンの学校系統図

第２項　サーミ教育の歴史[2)]

スウェーデンにおけるサーミに対する教育は、17世紀前半にまでさかのぼることができる。1619年に聖職者であったニコラス・アンドレー（Nicolaus Andrae）が「ABC-book」をサーミ語に翻訳して使用したとの記録が残っている。しかし、このテキストはあまり普及することはなかった。1632年には同じく聖職者であったオラウス・ヌレニウス（Olaus Nurenius）と議員であったヨハン・スクデ（Johan Skytte）が、サーミのキリスト教司祭を養成するための学校をターナビーに作った。この学校は「スクデンスカ」(Skytteanska）と呼ばれ、1600年代の終り頃にはラテン語やギリシア語まで教えるようになっていた。1772年までの間に14人のサーミの子どもをウプサラ大学へと入学させたという。

1723年にはスウェーデン王室の勅令として、おもな教会には学校を併設しなければならなくなった。これにともない、1732年にオーセーレとヨックモックに、ついで1743年にアリエプローグ、1744年にユッカスイェルヴィ、1748年にフリンゲ、1756年にイェリヴァーレと学校が作られていった。これらの学校ではサーミと移住者の子弟を対象に、おもにサーミ語を使って聖書などの授業がおこなわれていた。

続く19世紀はサーミの教育が大きく変動した時期であった。様々な制度改革が行われたのち、

1896年になると、サーミの教育はサーミ民衆学校（Sami folk school）、聖書学校（Bible school）、民衆学校（folk school）のいずれかでおこなわれるようになった。いずれの場合においても、授業はスウェーデン語でおこなわれた。

20世紀のはじめには、サーミは先の３種類に「冬季コース」(winter courses）と「スウェーデン聖約キリスト教団学校」(the Swedish Mission Covenant Church Schools）を加えた５種類の学校から通う学校を選ぶようになった。これらは合わせて35 ～ 40校あったという。

1913年に、サーミの文化を保護し、スウェーデンの文化と混じり合うのを防ぐという目的でノマド・スクールが設置された。遊牧をしていたサーミはノマド・スクールへの入学が義務づけられ、他の学校へはいけなくなった。一方で、遊牧をしていないサーミはノマド・スクールに入学できなかったため、結果として遊牧をするサーミ以外のスウェーデン社会への同化がすすむことになった[3)]。また、教育はスウェーデン語で行われた。ノマド･スクールはコータ（kåta）と呼ばれるサーミの伝統的なテントを模した校舎を村の学校に隣接して作ることがつねとされた。この校舎は学校教育には向かなかったため、1940年には廃止されることになる。

このようなサーミを分離する政策も、1960年代以降、徐々に選択の自由を尊重し、またサーミ文化を復興させるための政策へと転換していく。1957年に改正されたノマド・スクール令は、サーミ子弟がノマド・スクールと基礎学校のどちらに通うかを選択できるようにすべきであるとした。これを受けて1962年に、スウェーデン議会はサーミの人々が自由にノマド・スクールか基礎学校かを選択する機会を与える決議をした。1969年にはサーミ学校においては極力サーミ語を用いるべきであるとする教育計画が策定された。なお、1964年にスウェーデンの義務教育が９年間へと拡大した際、イェリヴァーレに唯一のサーミ中学が作られている。

1976年には、移民や言語マイノリティの母語教育を保障するという政策のなかで、基礎学校や高等学校においてもサーミ語教育が受けられるようになっていった。1980年にサーミ学校を管轄する教育局が独立し、1993年にサーミ議会が設置されるとサーミ学校の運営もサーミの手でおこなえるよう体制が整えられていくことになる。

次節以降にみていくように、50代以上であるサーミの人々はサーミ学校あるいはノマド・スクールに通いながらもサーミ語を使うことを禁じられており、今でもサーミ語を苦手とする者がいる。「サーミの失われた世代」(第４節参照）と呼ばれたこのような流れが変わったのが、1960年代の一連の改革であった。その背景には、サーミの人々の民族意識の高揚があった。1953年のヨックモックにおける第１回北欧サーミ会議の開催や1956年の北欧サーミ評議会の結成、1966年の「税山地」問題などが、サーミの人々のアイデンティティを刺激し、民族の権利を求める動きを活発化させていった。とくに1970年代にノルウェーでおこったアルタ川のダム建設反対運動は世界的に注目され、サーミの人々の意識を高めていったのである。

第３項　今日のサーミ教育の概況

先にみたように、スウェーデンの学校教育法は第１条において基礎学校や高等学校、障害児学校と並ぶ学校としてサーミ学校を位置づけている。サーミ学校は国立の学校として教育省が管轄し、サーミ議会によって指名された委員が属するサーミ教育局（Sameskolstyrelscen：SamS）が運営している。教育目的は学校教育法第８章第１条において、「サーミ民族の児童にサーミ民族のための

教育を基礎学校の第６学年まで提供すること」とされている。また、「義務教育学校、６歳児学級ならびに学童保育所のための教育課程」では、「サーミの文化遺産に親しんでいること」と「サーミ語で話し・読み・書くことができる」ことが卒業までの到達目標として設定されている。

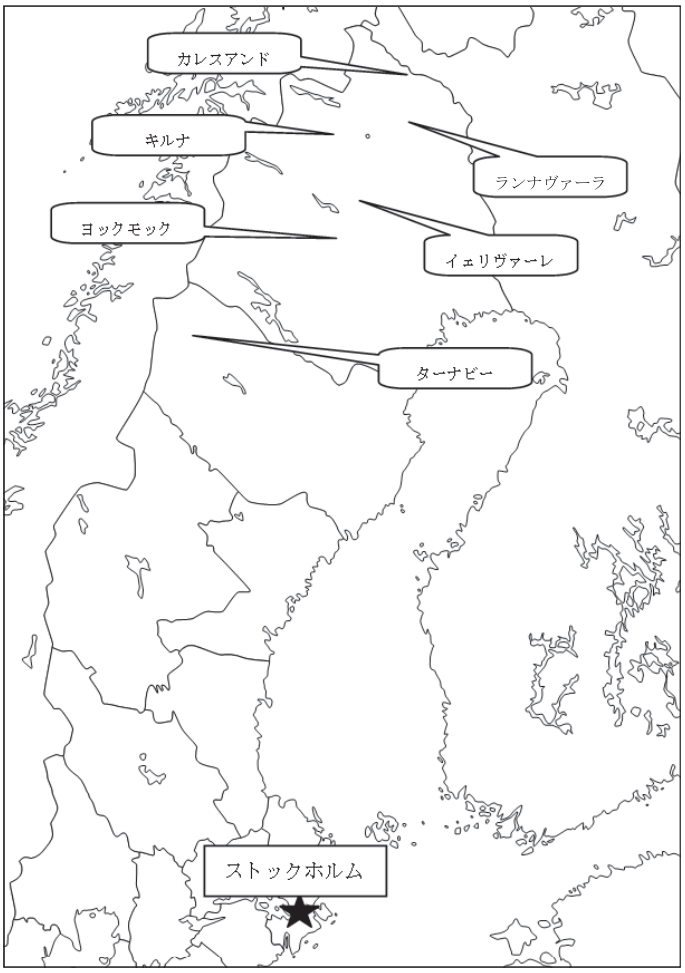


図７－１－２　サーミ学校の位置

サーミ学校は現在、カレスアンド、キルナ、イェリヴァーレ、ヨックモック、ターナビーの５か所に設置されている。図７－１－２からもわかるようにスウェーデンの北部に集中しており、ヴェステルボッテン県のターナビー以外はノールボッテン県である。近年、児童の減少によりランナヴァーラ（Lannavaara）のサーミ学校が閉鎖された。また、かつてはスウェーデン北西部のイェムトランド県にもサーミ学校があった[4)]。

選択制となっているため、現在のサーミ学校にはすべてのサーミ子弟が通っているわけではない。2003 ～ 04年の統計によると、学齢期のサーミ子弟のうち、サーミ学校へ通っているのは５～ 10%ほどであるという（山川 2009：66)。

サーミ学校は基礎学校の１～６年生にあたるため、７年生以降は基礎学校へ通うことになる。また、現時点で「サーミ高校」は存在しない。ただし、第２項でもふれたように、スウェーデンには移民子弟の母国語や少数言語を保護するため、ひとつの学校に同じ母語をもつ者が５人いる場合

は、その言語の教育をおこなうクラスを開講しなければならないというルールがある。これを利用し、多くのサーミ学校卒業生は基礎学校の７～９年生やそれ以降でもサーミ語教育を受け続けている。また、ヨックモックの高校にはサーミ語やサーミ文化を学べる授業が開講されているため、各地からサーミの生徒が集まっている。

高等教育としては、ウメオ大学やウプサラ大学、ルーレオ工科大学にサーミ語やサーミ文化を学べる学科が設置されている。また、ノルウェーのカウトケイノにはサーミ大学が設置され、ノルウェーのみならず近隣諸国のサーミを広く受け入れているため、スウェーデンから進学する者も少なくないという。

第２節　サーミ学校教員の教育実践と意識

第１項　本節の課題と調査の概要

前節で概観したような経緯をたどって今日にいたるサーミ学校の教師たちは、どのような教育実践を行い、いかなる意識をもっているのだろうか。本節ではこの点を確認したい。

制度的な流れでいうと、従来のノマド・スクール（遊牧学校）に代わり、1981年からサーミ学校の制度がスタートした（Solbakk ed. 2006）ことにより、スウェーデン語によるサーミ教育から、サーミ語を媒体としたサーミ教育への転換が図られた（Jansson 2005：45）。このことは、サーミ教育においても、復権と再生の動きが進んだということだと考えられる。

一方、2011年８～９月に実施した調査からは、サーミ学校の課題として、(1)教員不足、(2)運営コストの高さ、(3)サーミ以外のスウェーデン人からの「ねたみ」、(4)教材不足、(5)サーミの多様性への配慮不足、の５点が明らかになった（野崎 2012：81-2）。このうち、(1)～(3)については、教育実践だけでは解決できない部分であるが、(4)と(5)については、教育実践を展開するうえで大きな関わりをもつ。このことは、復権と再生が進みつつも、なお一定の課題が孕まれており、それは現場の教師にも大きな影響をもたらしていると考えられる。

そこで本節では、このようなサーミ教育の復権と再生が進むなかでも存在する問題について、教師たちがどのように取り組み、いかに受け止められているかを明らかにすることを一つの課題とする。ただし、この点だけに執着せず、現在のサーミ学校教師の教育と意識をトータルに把握するなかで、そのほかに見出される成果や課題についても確認していきたい。

本節で使用する調査データは、2012年９月に実施した調査で得られたものである。１人はヨックモックのサーミ学校教師で、直接インタビューを行った。残りはヨックモックとキルナのサーミ学校に調査票を預かっていただき、記入のうえ、返送していただく方法をとった。結果は、ヨックモックのサーミ学校の教師３人からのみ回答があった。そこで、このあわせて４人分のデータを用いて、以下の分析を進める。

第２項　サーミ学校教師の労働－生活史

まず、教師たちがどのような労働や生活の歩みを経てサーミ学校に勤めることになったのかを確認したい。まず、調査対象者の基本属性を表７－２－１にまとめた。性別からみると、４人とも女性である。教員の性別構成に関する詳しいデータはないが、2011年、2012年に訪れたキルナとヨックモックのサーミ学校では、男性教師の姿は見かけなかった。年齢は30～50歳代と、広く分布し

ている。

サーミ語を話せる家族については、B教諭は実父と祖父母、残りの３人は実母・実父・祖父母がサーミ語を話すことができ、生家ではサーミ語にふれる機会は少なくなかったと考えられる。

学歴については、C教諭はサーミ工芸学校、残りの３人は大学だが、A教諭は大学のほかにサーミ工芸学校でも学んでいる。サーミ工芸学校では皮とテキスタイルを勉強したとのことである。

そのサーミ文化やサーミ語についてだが、すべての教師に、学校でこれらの文化や言語を学んだ経験があった。しかし、D教諭はノマド・スクールに通っていたが、サーミ語は習わなかったと答えており、ノマド・スクールにおけるスウェーデン語主体の教育の問題点を確認することができる。

一方、A教諭とB教諭は、基礎学校でもサーミ語やサーミ文化を習ったと答えている。A教諭は、出身がヨックモックでなかったので、家から通えるところにサーミ学校がなかった。そのため、サーミ学校に通うためには寄宿舎に入らねばならなかった。１週間は寄宿舎に入ったが、それが嫌だったので、地元の基礎学校に通った。

また、この背景には、教育制度の変更がある。ちょうどA教諭が基礎学校に上がる段階で、サーミ学校に制度が変わったが、それまでは、寄宿舎に入ってでもノマド・スクールに通うことが基本であった。1962年に制度が変わり、ノマド・スクールへの通学も選択制になってはいたが（野崎2012：78)、「それまでは強制だったんです。私の時代から、普通の学校に子どもをやってもいいということになったんじゃないかしら。ちょっと、その辺よく分からないけど」というA教諭の話を聞く限り、A教諭の周りのサーミの人々の間では、ノマド・スクールに通学するのが基本というように受け止められていたようである。しかし、ノマド・スクールからサーミ学校に替わるなかで、寄宿舎生活を基本とするあり方にも変化が生じ、より地元の基礎学校に通いやすくなった。そして、この基礎学校でも、母語であるサーミ語を一定程度勉強することができたことも、基礎学校への入学を後押しすることになった。A教諭の回想では、当時の近所のサーミの子どもでは、サーミ学校に通う子どもと、地元の基礎学校に通う子どもがほぼ半々の割合だったようである。さらにA教諭は、大学でもサーミ語課程を履修した。

表７－２－１　調査対象者の基本属性

	性別	年齢	サーミ語が話せる家族	学歴	サーミ語や文化を学んだ学校
A教諭	女性	30歳代	実母・実父・祖父母	大学・サーミ工芸学校	基礎学校・高校・大学
B教諭	女性	40歳代	実父・祖父母	大学	基礎学校
C教諭	女性	50歳代	実母・実父・祖父母	サーミ工芸学校	サーミ学校
D教諭	女性	50歳代	実母・実父・祖父母	大学	ノマド・スクール（サーミ語の教育はなし）

一方、現在の家族の状況については、表７－２－２のとおりである。法律婚をしている教師は１人もいないが、未婚の者も含めて、全員に子どもがいる。パートナーは、A教諭以外はすべてサーミの人である。

子どもが通った（あるいは、通っている）学校については、全員がサーミ学校と回答しており、D教諭だけは、ほかに基礎学校にも通わせたとのことである。サーミ学校を選択した目的や理由であるが、「サーミ語の習得」と「仲間意識の形成」がおもなものである。

表７－２－２　家族の状況

	結婚の状況	相手のエスニシティ	同居家族	子どもの有無	子どもが通った学校	学校選択の目的・理由
A教諭	未婚	NA	２人	有	サーミ学校	サーミ語を生かすため。仲間意識をつくるため。サーミ学校への通学が自然だから。
B教諭	同棲（サムボ）*	サーミ	４人	有	サーミ学校	サーミ語のため。ここには同じような考えを持った子どもが他にも通学しているから。
C教諭	未婚	サーミ	１人	有	サーミ学校	子どもが、サーミ語ができるようになり、母語を得るため。
D教諭	離婚	サーミ	２人	有	サーミ学校と基礎学校	可能性を開いてくれるから。

注）*「同棲（サムボ）」については、第６章第１節を参照。

子どもに対する学歴期待については、C教諭は大学、B教諭とD教諭は大学院と回答している。また、これらの学歴期待には、出生順位や性別による違いはない。一方、A教諭は、子どもがまだ保育所段階なので「わからない」としながらも、「トナカイ業を伝承してほしい」と話している。また、「もし男の子がいたら、（トナカイ業を担うのは――新藤注）自然と彼になるだろうし、男の子がいなかったら、女の子でもやればいいと思う」と答えており、トナカイ業については、ややジェンダーによる期待の違いを見せた。A教諭の子どもは今は女の子が一人だけであり、その点ではジェンダーに固執するわけではないが、男の子がトナカイ業を担うというのは素朴な感覚としてみられるようである。

それでは、自身がサーミ学校教師になった状況について、さらに探ってみたい。この点を、表７－２－３に掲げた。これをみると、まず所有免許については、C教諭以外の３人は「スウェーデンの保育士資格」を持っていると回答している。C教諭については、免許は「なし」としている。しかし、「10年間保育ママ」をした経験があり、「サーミ語科のコース受講」の経験があるということで、サーミ学校で働くことになっている[5)]。

なお、サーミ教育に関わる教員免許としては、第Ⅰ部で扱っているノルウェーのサーミ大学における教員養成課程が有名である。しかし、スウェーデンのサーミ学校教師の認識としては、「ノルウェーで獲得した資格はノルウェーの資格になってしまう」（A教諭）というものであった。それゆえ、サーミ教育に特化せず、一般的なものであったとしても、スウェーデンでの教員免許ないしは保育士資格を取得することになっている。

「教師になった年」「初めてサーミ学校に勤務した年」「現在の学校に勤務した年」をみると、A教諭とB教諭はすべてが同じ年であり、教師生活のすべてを、このヨックモックのサーミ学校で過ごしていることがわかる。また、C教諭は、上記のように免許がないため、通常の教師とは異なっているからか「教師になった年」の回答はなかったが、1992年以来、ずっとヨックモックのサーミ学校に勤めていることがわかる。一方、D教諭だけは、もともとはサーミ学校ではない学校での教師経験が20年以上あり、その後、別のサーミ学校での勤務を経て、2007年以降、現在の学校に勤めている。

自宅からの通勤距離は、ほとんどが近隣で３km以内の範囲に収まっているが、D教諭だけは42kmと遠方からの通勤をしている。

表７－２－３　サーミ学校教師になった経緯

	所有免許	教師になった年	初めてサーミ学校に勤務した年	現在の学校に勤務した年	もっとも長く従事した職業	通勤距離
A教諭	スウェーデンの保育士資格	2002年	2002年	2002年	保育士、教員、トナカイ業、店員・販売員	1km
B教諭	スウェーデンの保育士資格	1999年	1999年	1999年	教員	2km
C教諭	なし（10年間保育ママ、サーミ語科コース受講）	NA	1992年	1992年	保育士	3km
D教諭	スウェーデンの保育士資格	1980年	2002年	2007年	教員	42km

このような教師たちが、サーミ学校の教師となることを選んだ理由は、「教育に携わりたかったから」と「サーミ文化に関われるから」「サーミのために働けるから」という、教育とサーミへの思いの２つに大別することができる（表７－２－４）。とくに、挙げられている回答をみると、サーミへの思いの方が強く見出される。サーミ社会への貢献という気持ちが、サーミ学校教師を選ばせている。

一方、選択肢には「金銭的（賃金的）に魅力があったから」を入れていたが、これを選んだ教師はいなかった。実際の待遇をそのまま示しているわけではないが、年間の世帯収入をみると、教師としてのキャリアがもっとも長いD教諭が、「50万SEK以上」（約700万円以上）となっている。これに対し、A教諭とC教諭は「10 ～ 30万SEK未満」（約130 ～ 400万円未満）となっていて、一定の開きがある。とくに、D教諭と同世代のC教諭がこの水準にとどまっているのは、表７－２－３で確認したように、正規の免許をもっていないことによる職務の違いが影響しているものと考えられる。

表７－２－４　サーミ学校教師を選んだ理由と収入

	サーミ学校教師を選んだ理由	年間世帯収入
A教諭	教育に携わりたかったから、サーミ文化に関われるから	10 ～ 30万SEK未満
B教諭	サーミのために働けるから	30 ～ 50万SEK未満
C教諭	サーミ文化に関われるから、サーミのために働けるから	10 ～ 30万SEK未満
D教諭	教育に携わりたかったから	50万SEK以上

第３項　基本的な教育スタイル

それでは、このような経緯でサーミ学校に勤務することになった教師たちは、どのような教育スタイルで子どもたちに接しているのだろうか。まず、表７－２－５に掲げた勤務時間と担当学年をみると、おおむね８～ 16時（ないし16時半）というのが標準になっている。ただし、１～５歳児を担当するA教諭は、３パターンのシフトがあり、早い日は６～ 15時、遅い日は10 ～ 18時半となっている。

担当学年については、他にはB教諭が６歳児学級から４年生までを担当していることがわかったが、それ以外の教師の担当学年はわからなかった。

表７－２－５　勤務時間と担当学年

	平均的な勤務時間	担当学年
A教諭	早番6:00-15:00　普通8:00-17:00　遅番10:00-18:30	１～５歳児
B教諭	8:00-16:30	６歳児学級、１年生、２年生、３年生、４年生
C教諭	8:00-16:30	NA
D教諭	8:00-16:00	NA

教師たちが子どもに接するときに使用する言語は、サーミ語が中心である（表７－２－６）。ス

ウェーデン語の比率は高くても「サーミ語とスウェーデン語が半々」であり、A教諭は「サーミ語と少しのスウェーデン語」、C教諭は「サーミ語」のみで子どもに接している。また、自身の教育実践にサーミ文化を取り入れることは、B教諭のみ「たまに」と答えたが、残りの教師は「つねに」と回答している。そこで取り入れられる文化であるが、ほとんどが「自然との接し方」や「世界観」といった、やや抽象的なものである。これは、第６章でも指摘したように、サーミ文化は、具体的なモノや行事などというよりも、「サーミの人々の生活様式そのもの」と捉えられていることと関わりがあるといえるだろう。トナカイの角を使った投げ縄や、雪に触れ、やわらかかったり硬かったりする雪の違いを知る[6)]など、自然に対してのサーミの人々の関わり方を、教育のなかにも取り入れていることがわかる。

表７－２－６　教育実践とサーミ語・サーミ文化

	子どもと接するときに使う言語	教育へのサーミ文化の取り入れ	取り入れているサーミ文化
A教諭	サーミ語と少しのスウェーデン語	つねに取り入れている	季節ごとのサーミの文化にちなんだ活動（トナカイを使った投げ縄など）
B教諭	サーミ語とスウェーデン語を半々	たまに取り入れている	自然のなかで絵を描くなど
C教諭	サーミ語	つねに取り入れている	NA
D教諭	サーミ語とスウェーデン語を半々	つねに取り入れている	少数民族の世界観、子どもの育て方、慣習など

このように、サーミ語やサーミ文化を取り入れた教育実践を可能にするのは、教師たちの高いサーミ語能力である。表７－２－７に掲げたように、北サーミ語を中心に、教師たちは高い運用能力を持っている。しかも、さらにその能力を伸ばしたいという意向も強い。サーミ語能力は、サーミ学校教師に欠かせない力量であり、そうであるがゆえに、高いサーミ語の能力を持った人材を確保することの難しさが課題となっていることは冒頭で指摘したとおりだが、現在勤務している教師は、サーミ語能力に関しては申し分ない水準に達しているものと考えられる。

表７－２－７　サーミ学校教師のサーミ語能力

	自分が使える サーミ語	もっとも得意なサーミ語の能力				サーミ語の学習意志
		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと	
A教諭	北サーミ語 ルレ・サーミ語（聞くのみ）	流暢に話せる	本が読める	議会のやりとりなどがわかる	どんな文書でも書ける	習いたい
B教諭	北サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	習いたい
C教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやりとりなどがわかる	どんな文書でも書ける	習う必要はない
D教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやりとりなどがわかる	簡単なメモが書ける	サーミ語もスウェーデン語も発展させたい

第４項　サーミ学校に対する意識

それでは、このようにサーミ語やサーミ文化を中心として教育が展開されるサーミ学校について、教師たちはどのような評価を与えているのだろうか。この点をまとめた表７－２－８をみると、「A. サーミ語を身につけられる」「B. サーミ語で学ぶので理解しやすい」「C. サーミの文化を身につけられる」「D. 進学するのに有利」「E. 就職するのに有利」「F. サーミの友だちができる」といったサーミ学校のメリットについては、ほとんどの教師が肯定的に評価している。逆に、「H. スウェーデン語を覚えられなくなりそう」「L. 進学しにくくなりそう」「M. 就職しにくくなりそう」といったサーミ学校に対するネガティヴな側面については、すべての教師が強く否定している。A教諭は、「こ

ちらで勉強した人が大学とか高等教育にどんどん進んで行って、なかには検事とか判事だとか、そういうふうなちゃんとした職業につく人がたくさんいる」と語っており、進学や就職面で何らの不利益も受けていないことが強調されている。これらのことから、教師たちはサーミ学校の教育に、一定の自負を持っていることがうかがえる。

ただし、評価がわかれた項目もある。たとえば、「G. サーミ以外の子どもとの関わりが薄くなりそう」や「H. スウェーデンの習慣や文化にふれる機会があまりない」といった項目からは、サーミ以外のスウェーデン社会との接点がやや薄くなるかもしれないと感じる教師が、少なからず存在することがわかる。また、「N. サーミ語を学ぶよりもスウェーデン語以外の外国語教育に力を入れた方がよい」というように、「スウェーデン語＋サーミ語」ではなく、「スウェーデン語＋外国語」の教育を重視する必要も、一部の教師からは指摘された。

また、現状ではおおむね充実した教育が展開できてはいるが、「J. 設備が不十分である」や「K. サーミ学校に、もっと公的な支援が欲しい」という項目については肯定的な回答も多く、より充実した教育を実現するためにはハード面やシステムレベルの改善が必要との認識ももたれている。A教諭からは、「この建物自体が昔は寄宿舎だったので、だから保育所用の建物ではない」との問題点も指摘されている。

表７－２－８　サーミ学校に対する評価

	A教諭	B教諭	C教諭	D教諭
A. サーミ語を身につけられる	1	1	2	1
B. サーミ語で学ぶので理解しやすい	1	2	2	1
C. サーミの文化を身につけられる	1	1	1	1
D. 進学するのに有利	1	1	1	1
E. 就職するのに有利	2	2	1	1
F. サーミの友だちができる	1	1	1	1
G. サーミ以外の子どもとの関わりが薄くなりそう	2	3	2	4
H. スウェーデンの習慣や文化にふれる機会があまりない	4	2	3	4
I. スウェーデン語が覚えられなくなりそう	4	4	4	4
J. 設備が不十分である	2	2	2	4
K. サーミ学校に、もっと公的な支援が欲しい	1	1	1	1
L. 進学しにくくなりそう	4	4	4	4
M. 就職しにくくなりそう	4	4	4	4
N. サーミ語を学ぶよりもスウェーデン語以外の外国語教育に力を入れた方がよい	4	4	1	4

注）１＝とてもそう思う、２＝少しそう思う、３＝あまりそう思わない、４＝まったくそう思わない。

第５項　保護者との関わり

一方、保護者とは、どのような関わりがもたれているのだろうか。まず、保護者からの相談について、表７－２－９にまとめた。これをみると、資格をもたないC教諭は相談を受けることが「あまりない」と答えているが、それ以外の教師は、頻繁に相談を受けていることがわかる。

相談の内容は、子どものしつけや発達、学校の教育内容や過ごし方、教師と子どもの関わり、子ども同士の関わりなど多岐にわたる。A教諭は、送り迎えの際に、これらの話題について保護者と話をするという。

表７－２－９　保護者からの相談

	相談を受けること	相談の内容
A教諭	よくある	子どものしつけ、子どもの発達、学校の教育内容、教師の子どもへの接し方
B教諭	よくある	子どものしつけ、子どもの発達、学校の教育内容、教師の子どもへの接し方
C教諭	あまりない	子どもの発達
D教諭	たまにある	保育所での一日、友達関係、園での活動

一方で、教師の側からは保護者に対し、一定の要望も出されている。この点をまとめた表７－２－10をみると、「A. 子どもの教育に関して話をする機会がほしい」や「C. 学校の行事にもっと参加してほしい」という項目については、肯定的な回答する教師が多かった。また、「E. 子どもを学校に任せきりにしないでほしい」も、D教諭以外は肯定的な回答を示しており、教師の大方が共有する意識になっている。A教諭はこの項目について、「サーミ学校に全部言語の発達について責任を負わせるのは間違っていると思います」と述べ、サーミ学校への過剰な期待を批判し、家庭と学校との連携が必要だとの考えを示している。これらのことから、教師たちは、保護者の学校への関わりには満足しておらず、より密接な関係の構築を求めているといえる。

これに対して、「D. 家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい」は肯定的な回答が、「B. 保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい」には肯定・否定の両面から意見が寄せられているが、A教諭・D教諭は、それぞれ無回答であった。A教諭は、「これは学校の先生用の調査票なので、私の仕事の内容や状況とは違うので答えられない」と述べている。D教諭の調査票には、「B. 保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい」については「別に意見はない。プライベートなことなので」と記載され、「D. 家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい」については「意見なし。これは保育に関係がないので」と書き込んでいる。両教諭とも、これらの項目が「自分の仕事の範囲外」との認識をもっていることがわかる。

また、その他の保護者への要望として、D教諭は「私の望みは、保護者が子弟の学びやサーミ保育の発展や将来についての関心をもち参加すること」と記載し、B教諭は「保護者や、もっと年長の世代も授業に協力、協賛してくれるとよい。とくに、サーミ文化をテーマにしたときなど」と答えている。このように、教師たちは、サーミに対する教育の向上には、保護者やサーミ住民の幅広い協力が必要との考えを持っていることがわかる。

表７－２－10　保護者に対する評価

	A教諭	B教諭	C教諭	D教諭
A. 子どもの教育に関して話をする機会がほしい	1	1	2	1
B. 保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい	NA	2	3	NA
C. 学校の行事にもっと参加してほしい	2	1	1	2
D. 家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい	NA	1	1	NA
E. 子どもを学校に任せきりにしないでほしい	1	1	2	3

注）１＝とてもそう思う、２＝少しそう思う、３＝あまりそう思わない、４＝まったくそう思わない。

第６項　サーミ学校と子どもの将来

ただし、サーミ学校の今後のあり方については、やや意見がわかれる。この点をまとめた表７－２－11をみると、「増やすべき」が２人、「現状でよい」が１人、「減らすべき」が１人と、回答がわかれている。その理由をみると、「増やすべき」については、「サーミの子どもの学ぶ場がもっと

増えればいい」という考えが示されていることがわかる。これに対し、「減らすべき」としたC教諭は「子どもたちが国中に散在してしまう」ことを懸念しており、あまりに学校の数が多くなると、サーミの子どもが散り散りになってしまい、サーミの子ども同士のまとまりが形成されにくくなることを懸念していることがわかる。つまり、「サーミ学校に問題があるから減らすべき」と主張しているのではなく、あくまで子どもの生育環境の観点から、「減らすべき」としていると捉えられる。

表７－２－11　サーミ学校の今後のあり方

	今後のあり方	その理由
A教諭	増やすべき	今でも随分やっているけれども、増えればもっといいから。
B教諭	現状でよい	NA
C教諭	減らすべき	子どもたちが国中に散在してしまうから。
D教諭	増やすべき	もっと多くのサーミ子弟が、サーミ向けの活動（学校・保育所など）において、学び育ってゆく可能性を持てることを願うから。

これに対し、現在は基礎学校６年生と同等の学年までしか設けられていないサーミ学校については、「大学までつくるべき」とすべての教師が答えている（表７－２－12)。さらに、サーミ学校のカリキュラムについても、「もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきである」との答えで一致している。このように、サーミ学校の教育をより拡充していく方向を期待する背景については十分に確認できなかったが、Jansson（2005）は、教師がサーミ語での教育を重視しているのにもかかわらず、サーミ学校に通う子どもたちであっても、子ども同士ではスウェーデン語を使っていることを指摘している。このことが現在でもあてはまるとすれば、さらなるサーミ語教育のため、授業時数の増加と、サーミ学校での教育期間の拡充を願っていると考えることもできよう。

ただし、現状では希望者のみを受け入れているサーミ学校のあり方は、「このままでよい」とする教師が多く、サーミの子どもはサーミ学校に通うことを原則にした方がよいとまでは考えていない。これについてA教諭は、「自由意志で」と述べており、その点ではD教諭の「すべての人に選択の自由があるべき」と通じるところもある。D教諭の「すべての人」が、サーミ以外の人々も指し、サーミ以外の人々もサーミ学校に受け入れることを考えているのかどうかはわからないが、少なくとも「サーミだからサーミ学校」と強制することには反対していることがうかがえる。その点では、中等・高等教育にサーミ学校を拡充するという発想も、「中等・高等教育でも、サーミ学校を選べる自由を保障すべき」との考えにもとづいてのものかもしれない。

表７－２－12　サーミ学校の制度やカリキュラムの考え

	中等・高等教育レベルのサーミ学校	サーミ学校のカリキュラム	サーミ学校への子どもの受け入れ（現状は希望者のみ）
A教諭	大学までつくるべき	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきである	このままでよい
B教諭	大学までつくるべき	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきである	このままでよい
C教諭	大学までつくるべき	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきである	このままでよい
D教諭	大学までつくるべき	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきである	すべての人に選択の自由があるべき

サーミ学校に通う子どもたちの将来については、「サーミとして積極的に生活してほしい」と回答した教師が３人であった。残る１人はD教諭であるが、「私はかれらが、自分の思うまま、ありのままでいられることを望む」と答えている。つまり、多くは「サーミとして生きていくこと」を望んでいるが、サーミにとらわれなくてもよいとする考え方も若干存在することがわかる。

第７項　現在の生活の満足度と今後のサーミ教育のあり方

一方、教師たちは、現在の自分たちの生活については、おおむね満足している。この点をまとめた表７－２－13をみると、「仕事内容」や「収入」についても、基本的には満足度が高いが、B教諭はやや満足感が低い状況になっている。その理由は判然としないが、A教諭は「自分はサーミ語ができるから、職場に満足している」と語っており、サーミ語の能力が十分発揮され、サーミ社会にも貢献しているという意識をもつことができているものと思われる。その点でB教諭の場合は、もしかしたら、自身のサーミ語能力などに見合った処遇を受けていないとの意識があるのかもしれない。ただし、「生活全般」については「満足」が３人、「地域の環境」についても、「満足」と「どちらかといえば満足」が２人ずつとなっており、満足感は総じて高めである。

表７－２－13　現在の生活についての満足度

	仕事内容	収入	地域の環境	生活全般
A教諭	満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	満足
B教諭	どちらともいえない	どちらかといえば不満	満足	どちらかといえば満足
C教諭	満足	満足	どちらかといえば満足	満足
D教諭	どちらかといえば満足	満足	満足	満足

教師たちの日常は、サーミの人々とのつきあいが多くなっている（表７－２－14)。そうであるがゆえに、サーミの素晴らしさを感じることも多い。それは、「トナカイ、言語、工芸」といった具体的な事物も含まれるが、「サーミに生まれたということ」「自分がありのままの自分でいられること」という、生活のあり方全般にわたる点も「サーミの素晴らしさ」として挙げられている。この点は、繰り返し指摘してきたが、サーミの人々の自然との関わり方、生き方そのものを「サーミの文化」とみなす発想に通じるだろう。

一方、教育については、具体的な課題が提起されている。まずは、「サーミの子どもや若者が自分の文化について自分の言語で教育を受けるのは当たり前」(D教諭）と、サーミ語とサーミ文化からなるサーミの教育の確立が求められる。さらに、サーミ語に関しては、「サーミ集住地だけではなく国中で生きている言語となるため、政府はよく考慮してから、資源を分配すべき」(C教諭）とされるように、サーミの人々が暮らすところだけでなく、より広く利用可能なものとして発展させることが望まれる。それは「サーミ語を使って行われる職業がもっとたくさんあるべき」(A教諭）との指摘とも重なり、サーミ語が生かせる場をさらに広げていくことが求められる。そうすることで、これからの世代にも、サーミ語やサーミ文化を維持・発展させようという機運が高まり、次々に受け継がれていくことになる。その重要な基盤をサーミ学校が担っているともいえるだろう。

表７－２－14　日常の交流と今後のサーミ教育のあり方

	日常の交流	サーミの素晴らしさ	サーミの子どもの教育
A教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	NA	サーミ語を使って行われる職業がもっとたくさんあるべき。そうなると、サーミ語ができるようになりたい、サーミの将来をこれからずっと伝承していきたい、という気持ちを高める。
B教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	サーミの文化遺産、トナカイ、言語、文化、工芸	NA
C教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	サーミに生まれたということ。素晴らしいことは命を得たことだろう。これ以上のものはない。	サーミ集住地だけではなく国中で生きている言語となるため、政府はよく考慮してから、資源を分配すべき。
D教諭	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない	自分がありのままの自分でいられること	サーミの子どもや若者が自分の文化について自分の言語で教育を受けるのは当たり前のことだ。これが実現されるように。

第８項　小括

以上、限られたデータではあるが、サーミ学校教師の教育実践と意識のあり方について、多様な角度から探ってきた。ここでの知見のすべてをカバーすることはできないが、冒頭に掲げた課題に照らして、以下の４点を指摘しておきたい。

第１に、サーミ語教育の教材不足は、教師たちの高い能力と努力によって補われていた。教師たちは、子どもたちの教育にはできるだけサーミ語を用いるようにしており、教育内容にも、サーミの文化を積極的に取り入れようとしていた。また、今後のサーミ学校のカリキュラムのあり方については、さらにサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべきと考えており、サーミ語やサーミ文化教育をさらに拡充しようという意欲ももっていた。そして、このようなサーミ語やサーミ文化教育を可能にさせているのが、教師のもつ高いサーミ語能力である。ほとんどの教師が、サーミ語に不自由がない状況になっていた。このような高いサーミ語能力によって、サーミ学校での教育は一定の水準を保つことになっており、そのことが、教師たちに、自負心と満足感をも与えていた。

しかし第２に、サーミの子どもたちのなかにある多様性については、それほど意識されていないようであった。上述のサーミ語能力についても、ほとんどは北サーミ語の能力のみであり、ルレ・サーミ語を解するものはごくわずかで、南サーミ語を使える教師は、今回の対象者には入っていなかった。このことは、北サーミ語以外のサーミ語を話す子どもたちに対する教育保障の面で大きな問題が生じうる。

さらに第３に、表現は不適切であるかもしれないが、サーミ学校教師はサーミ社会のいわば「勝ち組」であった。そのことは、１点目に指摘した高いサーミ語能力の保持に端的に表れている。この能力をもつがゆえに、サーミ学校という活躍の場も手に入れられるし、経済的な安定もそれなりに確保されていた。また、父母・祖父母がサーミ語を使えると答える者が多く、本人の努力・能力に加え、家庭におけるいわば「文化資本」(Bourdieu　1979＝1990）の供給もあって、高いサーミ語能力の獲得につながった面もあるかもしれない。

しかし、残念ながら、サーミの人々が、すべて高いサーミ語を獲得できるわけではないだろう。サーミ学校に通っていても、休み時間や放課後、家庭ではスウェーデン語を使う子どもも少なくない（Jansson 2005)。そのうちの一部は、サーミ語能力を十分に取得しないままに卒業するとすれば、教師たちが歩んだ「サーミ社会のサクセスストーリー」を踏襲させることだけを目標とするのでは、子どもたちの多様性に十分に配慮しきれない部分も生じるかもしれない。

ただ第４に、サーミ学校教師の「成功」も、「サーミ学校」という活躍の舞台ができてこそ実現したものである。これは、それ以前のノマド・スクールのころには実現しなかったであろう。その点では、サーミ文化の復権と再生が、サーミ社会での「成功」を実現させる場を増やす効果ももたらしたといえる。

そのためにも、今後のサーミ学校や教師は、(1)サーミ語やサーミ文化、そしてサーミとしてのアイデンティティなどの形成を重視しながら、サーミ文化の復権と再生を担う人材をさらに育てることと、(2)子どもの実態をふまえながら、サーミ社会の内外にわたる多様な将来に接続可能な教育を提供することの両面を進めることが重要となるかもしれない。

第３節　サーミ学校保護者の教育意識と民族意識

第１項　本節の課題と調査の概要

民族学校を考える場合、教育対象となる子どもたちの保護者がどのような意識をもっているかが重要となってくる。当然のことながら、民族学校を作っても利用する者がいなければ意味がなく、また、利用するかどうかを最終的に決定するのは保護者たちだからである。

たとえばわが国では、アイヌ語の教育やアイヌ民族学校の設立を議論しても、「アイヌ語を勉強しても社会に出てから役に立たない」「民族学校を作っても就職できない」[7] などといった意見がアイヌの人々のなかからも出てくる状況がある。保護者のすべてがこのように考えているのであれば、民族学校のもつ可能性は、限りなく小さなものにならざるをえない。

この点において、サーミ学校はどうであろうか。第１節でもみたように、サーミの人々はサーミ学校へ通わなければいけないわけではなく、一般的なスウェーデン人が通う基礎学校を選ぶこともできる。サーミ学校を利用している保護者たちは、基礎学校ではなくサーミ学校を、意思をもって選択しているのである。では、保護者たちはどのような意義をサーミ学校に見出し、期待しているのか。その意識を探ることが本節の課題となる。

サーミ学校保護者への調査は、2012年９月に行った。キルナとヨックモックのサーミ学校を通して保護者に対して調査票と切手付の封筒を配布し、郵送にて回収した。なお、調査対象者の選出についてはそれぞれのサーミ学校の校長に一任しており、保護者全員へ配布できたわけではない。その点で、調査結果にはバイアスがかかっていることが予想される。配布数はキルナ校が40票、ヨックモック校が15票の計55票であり、有効回収数はキルナ校８票、ヨックモック校７票で計15票であった。有効回収率は26.8％である。また、ヨックモック校では、自身も子どもをヨックモック校にあずけているという保育担当教員に直接話しを聞くことができた。データの集計には、その分も含めているため、母数は16票である。

回答者の属性は以下の通りである。回答者は、サーミ学校児童の母親が10人、父親が５人である。このうち、婚姻関係にある配偶者がいる者は７人で、３人は事実婚、２人は未婚である（それ以外は不明）。年齢はもっとも若い者が27歳、もっとも高齢の者が67歳で平均42.1歳である。保護者の出身地としては、キルナが５人でもっとも多く、ついでイェリヴァーレが４人、ヨックモックとポリウスがそれぞれ２人、その他が２人、無回答が１人であった。なお、その他はエステルスンドとエナーレである。

表７－３－１　サーミ学校児童と回答者の関係、学校

	関係			学校		合計
	母	父	その他	キルナ	ヨックモック	
度数	10	5	1	8	8	16
パーセント	62.5	31.2	6.2	50.0	50.0	100.0

以下、第２項において、保護者たちが何を求めてサーミ学校を利用しているのか、また、サーミ学校に対しどのような考えを抱いているのかを明らかにしていく。第３項では、サーミ学校からはなれてサーミの人々や文化等に関する一般的な意識を確認する。その際、保護者のサーミ語能力にとくに注目をして分析を試みる。最後に第４項で、本調査から得られた知見を整理する。

第２項　サーミ学校に対する意識

調査対象者の子どもたちは、６歳児学級[8)]が５人、１年生が４人、２年生と３年生が５人ずつと、全員が３年生以下の低学年である。なお、合計が16を上回るのは複数の子どもがいるケースがあるためである。全員が６歳児学級からずっと同じ学校へ通っている。

表７－３－２　あなたのお子さんは何年生ですか

	６歳児学級	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	N
度数	5	4	5	5	0	0	0	15
パーセント	33.3	26.7	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	100.0

基礎学校へ通わせるという選択肢もあるなかで、あえてサーミ学校を選んだ背景には、サーミ語やサーミ文化を学ぶことができるというサーミ学校の特色がある。サーミ学校に通わせた理由を聞くと、「サーミ語が身につくから」が12人、「サーミの文化が学べるから」と「子どもにサーミの友達ができるから」がそれぞれ10人と、きわだって多くなっている。サーミ関係以外の教育方針に言及している者は１人であるように、サーミの言語、文化を学ぶという積極的な意味づけをサーミ学校にしていることがわかる。

表７－３－３　お子さんをサーミ学校に通わせたのはなぜですか

	サーミ語が身につくから	サーミの文化が学べるから	子どもにサーミの友達ができるから	保護者にサーミの知り合いができるから	サーミ関係以外の教育方針が気に入ったから	先生方が熱心だから	基礎学校の教育方針に不満があるから	家から近いから	自分の出身校だから	その他	特に理由はない	無回答	N
度数	12	10	10	3	1	6	0	3	5	4	0	1	16
パーセント	75.0	62.5	62.5	18.8	6.2	37.5	0.0	18.8	31.2	25.0	0.0	6.2	100.0

サーミ学校を選択したその背景にもう少しふみこんでみよう。表７－３－４はサーミ学校に関するより詳細な評価を聞いたものである。これをみると、第１に、サーミの言語、文化の学習に対する保護者たちの高い期待がみてとれるだろう。「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した者の割合をみていくと、「サーミの文化を身につけられる」と「サーミの友だちができる」はともに100%である。また、「サーミ語を身につけられる」も93.8%と１人を除いた全員が肯定的な評価をくだしているのである。

その一方で、サーミ以外の文化や人々との交流が薄くなってしまうことへの不安はほとんどみてとれず、「サーミ以外との関わりが薄くなりそう」は25.0%、「スウェーデンの習慣や文化に触れる機会があまりない」は18.8%、「スウェーデン語が覚えられなくなりそう」は6.2%にすぎなかった。スウェーデンにおけるサーミ人口については諸説あるものの、多めに見積もったものであっても20,000人ほどである。これはスウェーデンの人口の0.2%ほどでしかない。このような絶対的に少数者である状況は、サーミ地域と呼ばれるキルナやヨックモックでもさほどかわらない。国内でもっともサーミ比率が高いといわれるヨックモックでさえも、サーミは人口の１割しかおらず、少数派である。このような状況が、マジョリティの言語や文化を忘れてしまう危険性を限りなく低くしているのであろう。

進路に対しても保護者はとくに不安を抱いていないようである。「進学しにくくなりそう」と考える者は18.8%で、「進学するのに有利」と考える56.3%をはるかに下回る。就職についても、しにくくなりそうという者（6.2%）よりも「就職するのに有利」と考える者（56.3%）の方が多い状況である。

表７－３－４　サーミ学校にかかわる以下の項目についてどう思いますか

	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	合計
サーミ語を身につけられる	8(50.0)	7(43.8)	1(6.2)	0(0.0)	16(100.0)
サーミ語で学ぶので理解しやすい	3(18.8)	7(43.8)	4(25.0)	2(12.5)	16(100.0)
サーミの文化を身につけられる	11(68.8)	5(31.2)	0(0.0)	0(0.0)	16(100.0)
進学するのに有利	6(37.5)	3(18.8)	5(31.2)	2(12.5)	16(100.0)
就職するのに有利※	3(18.8)	6(37.5)	4(25.0)	2(12.5)	16(100.0)
サーミの友だちができる	10(62.5)	6(37.5)	0(0.0)	0(0.0)	16(100.0)
サーミ以外との関わりが薄くなりそう	1(6.2)	3(18.8)	6(37.5)	6(37.5)	16(100.0)
スウェーデンの習慣や文化に触れる機会があまりない	0(0.0)	3(18.8)	7(43.8)	6(37.5)	16(100.0)
スウェーデン語が覚えられなくなりそう	0(0.0)	1(6.2)	3(18.8)	12(75.0)	16(100.0)
設備が不十分である	1(6.2)	5(31.2)	4(25.0)	6(37.5)	16(100.0)
学校にもっと公的な支援が欲しい	7(43.8)	5(31.2)	3(18.8)	1(6.2)	16(100.0)
進学しにくくなりそう	1(6.2)	2(12.5)	5(31.2)	8(50.0)	16(100.0)
就職しにくくなりそう※	1(6.2)	0(0.0)	4(25.0)	3(18.8)	16(100.0)
サーミ語より外国語教育に力を入れたほうがよい	2(12.5)	3(18.8)	6(37.5)	5(31.2)	16(100.0)

※無回答１。

サーミ語、サーミ文化を身につけることへの要求は、学校へ対する要望にも表われている。サーミ学校に対する要望をみると、「基礎学力をもっと身につけてほしい」という者は12.5%しかいない。スウェーデン語や英語の時間を増やしてほしいという者もほとんどおらず、サーミの言語、文化に特化した内容を徹底することを保護者が求めていることがわかる。「もっとサーミ語の勉強をしてほしい」という者は43.8%、「もっとサーミ文化の勉強をしてほしい」という者は25.0%であった。カリキュラムについても、表７－３－６をみると、もっとサーミ語やサーミ文化の時間を「増やすべき」という者が７人いる一方で、「減らすべき」という者はひとりもいなかった。「このままでよい」という者も「増やすべき」と同数の７人であることから、ほとんどの保護者はサーミの言語や文化を重視する現状を肯定的にとらえていることがわかるのである。

表７－３－５　サーミ学校に対し要望はありますか

	もっとサーミ語の勉強をしてほしい	もっとサーミ文化の勉強をしてほしい	基礎学力をもっとみにつけてほしい	もっとスウェーデン語の勉強をしてほしい	もっと英語の勉強をしてほしい	もっとカリキュラムに余裕がほしい	先生にもっと熱心にしてほしい	その他	特に要望はない	合計
度数	7	4	2	0	1	3	2	4	5	16
パーセント	43.8	25.0	12.5	0.0	6.2	18.8	12.5	25.0	31.2	100.0

表７－３－６　サーミ学校のカリキュラムについて、あなたの考えにもっとも近いものに○をつけてください。

	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を増やすべき	もっとサーミ語やサーミ文化の時間を減らすべき	このままでよい	無回答	合計
度数	7	0	7	2	16
パーセント	43.8	0.0	43.8	12.5	100.0

これまでにみてきたように、サーミ学校を利用する保護者たちは、サーミ学校の趣旨や現状に対し、一定の満足をしているようである。マジョリティであるスウェーデンの言語や文化との隔絶を不安視する者はほとんどおらず、また、サーミ学校へ通うことによる将来の不安を感じている者もきわめて少数派である。

サーミ学校の今後について聞いても、「増やすべき」が半数の８人であり、「減らすべき」という者はひとりもいなかった。サーミ学校の現状は厳しく、かつて６校あったサーミ学校のうち、ランナヴァーラ校が児童の減少により閉鎖したばかりである。また、残りの５校のうち、ターナビー校は2011年の時点で児童数が７人だけであった。このような状況のなかで、サーミ学校保護者たちがもっとサーミ学校を増やすべきだと考えていることは、サーミ学校の将来を構想するうえで大きな味方となるのではないか。

また、スウェーデン国内のサーミ学校は、現在基礎学校の中級学年までしか設置されていない。希望すれば、基礎学校上級学年以降、サーミの子どもたちだけのクラスを編成することなどが権利として認められているが、サーミのための大学をもっているノルウェーなどと比較すると見劣りする感は否めない。保護者の意見としても、基礎学校中級学年までの現状でよいという者は２人しかおらず、４人は基礎学校卒業まで、そして８人は大学まで、サーミ学校を設置することを希望しているのである。

表７－３－７　サーミ学校は今後どのようにすべきだとお考えですか

	増やすべき	現状で良い	減らすべき	無回答	合計
度数	8	6	0	2	16
パーセント	50.0	37.5	0.0	12.5	100.0

表７－３－８　現在サーミ学校は基礎学校段階にしか設置されていません。基礎学校上級学年や高等学校、大学段階でもサーミ学校を作るべきだと思いますか。

	必要ない	基礎学校上級学年まで	高等学校まで	大学も	その他	無回答	合計
度数	2	4	1	8	0	1	16
パーセント	12.5	25.0	6.2	50.0	0.0	6.2	100.0

第３項　サーミ保護者の民族、言語、文化に対する意識

続いて本項では保護者たちのサーミ語能力や家庭環境、サーミ自体に対する意識などを確認する。表７－３－９にあるように、両親ともにサーミの血筋を引いている者が７人と半数近くいる。サーミ語に関しては、両親とも使える者が７人、実母のみ使える者が４人、実父のみ使える者が２人だった。祖父母世代しかサーミ語が使えず、両親は話せないという者も２人いる。方言別に使えるサーミ語の内訳をみてみると、もっとも多いのはサーミ全体でみても最大の話者をもつ方言である北サーミ語で、12人が使うことができると回答している。続いてルレ・サーミ語が使える家族がいる者が１人、自分自身が使えるという者が４人である。出身地でみてみると、キルナ出身者は５人全員が北サーミ語使用者である。イェリヴァーレ出身者４人は、全員が北サーミ語を使え、かつルレ・サーミ語を使える者が２人、南サーミ語を使える者が１人いる。ルレ・サーミ語しか使えないという１人はヨックモック出身、南サーミ語しか使えないという１人はエステルスンド出身であった。

表７－３－９　サーミの血筋の方、サーミ語を使える方

	両親とも	実母のみ	実父のみ	祖父母のみ	無回答	合計
サーミ血筋	7(43.8)	4(25.0)	3(18.8)	0(0.0)	2(12.5)	16(100.0)
サーミ語	7(43.8)	4(25.0)	2(12.5)	2(12.5)	1(6.2)	16(100.0)

表７－３－10　家族が使えるサーミ語、自身が使えるサーミ語

	北サーミ語	ルレ・サーミ語	南サーミ語	その他のサーミ語	使えない	無回答	合計
家族	12(75.0)	1(6.2)	2(12.5)	0(0.0)	—	2(12.5)	16(100.0)
自分自身	12(75.0)	4(25.0)	2(12.5)	0(0.0)	1(6.2)	1(6.2)	16(100.0)

各自のもっとも得意なサーミ語の能力について、表７－３－11から表７－３－14にまとめている。それぞれの選択肢は、表頭でみた場合に左側へいけばいくほど、より高度な能力を持っていると想定している。「話すこと」「読むこと」「聞くこと」ではそれぞれ一番左の選択肢である「流暢に話せる」「本が読める」「議会のやりとりがわかる」を選ぶ者がもっとも多くなっている。２番目のカテゴリーである「かなり話せる」「簡単な雑誌が読める」「日常生活の話題がわかる」「簡単なメモが書ける」を選ぶ者も合わせて考えると、保護者たちがサーミ語の能力に一定の自信をもっていることがうかがえる。なお、全体をみれば、「読むこと」「聞くこと」と比較して「話すこと」「書くこと」は苦手とする者がやや多いようである。

保護者たちのサーミ語に対する思いは強く、ある程度の能力をもっているうえでさらにサーミ語を習いたいとしている者が多い。10人が今後サーミ語を習いたいと考えており、習うつもりはないという者は１人もいなかった。サーミ語能力の「書くこと」で「何も書けない」を選んだ２人（うち１人は「読むこと」でも「何も読めない」を選択している）も、サーミ語に関心がないわけではなく、ともに「習いたい」と回答している。

表７－３－11　もっとも得意なサーミ語の能力：話すこと

	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	無回答	合計
度数	6	3	5	0	2	16
パーセント	37.5	18.8	31.2	0.0	12.5	100.0

表７－３－12　もっとも得意なサーミ語の能力：読むこと

	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	無回答	合計
度数	8	2	3	1	2	16
パーセント	50.0	12.5	18.8	6.2	12.5	100.0

表７－３－13　もっとも得意なサーミ語の能力：聞くこと

	議会のやり取りがわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことがわかる	ほとんどわからない	無回答	合計
度数	6	5	3	0	2	16
パーセント	37.5	31.2	18.8	0.0	12.5	100.0

表７－３－14　もっとも得意なサーミ語の能力：書くこと

	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字がいくつか書ける	何も書けない	無回答	合計
度数	4	5	3	2	2	16
パーセント	25.0	31.2	18.8	12.5	12.5	100.0

サーミであることに関する意識も高く、14人はサーミとして意識することが日常にあると回答している。意識することはないと答えたのは２人であった。

どのような時にサーミであることを意識するのかといえば、「家庭でサーミのことを話題にするとき」と「家庭でサーミの文化を実践するとき」がともに13人ともっとも多く、それ以外の選択肢も多くの人に選ばれている。「サーミであることで差別を受けたとき」という者も９人おり、サーミであることが決して肯定的な経験だけに裏付けられているわけではないことがうかがえた。その他としては、「トナカイといる時」という回答があり、サーミの人々にとってトナカイがただの飼育対象としてだけではなく、シンボルとしての役割をもっていることがわかる。

表７－３－15　サーミであることを意識するのはどのような時ですか

	家庭でサーミのことを話題にするとき	家庭でサーミの文化を実践するとき	家庭以外でサーミの人々と関わるとき	サーミ以外の人々と関わるとき	サーミの文化や歴史に触れたとき	サーミ語に触れたとき	身体的特徴に気づいたとき	サーミであることで差別を受けたとき	その他	合計
度数	13	13	12	12	11	11	10	9	3	14
パーセント	92.9	92.9	85.7	85.7	78.6	78.6	71.4	64.3	21.4	100.0

子どもの頃の交流関係をみると、スウェーデン人との同化･融合がすすんでいることからか、サーミ以外の人々とのかかわりは強く、また、全員が「仲良く付き合っていた」とするなど、良好な関係をもっていたことがわかる。ただし、一部にいじめられた、いじめ返したという経験を書く者もいる。サーミ同士となると「あまり交流していなかった」という者が４人いる。

表７－３－16　子どものころにサーミの方々との交流はありましたか

	盛んに交流していた	必要に応じて交流していた	あまり交流していなかった	まったく交流していなかった	合計
度数	11	1	4	0	16
パーセント	68.8	6.2	25.0	0.0	100.0

サーミであることの自覚は、「６歳くらいまで」が８人ともっとも多い。「わからない」という者の中にも、気づいたら知っていたという者がおり、その多くが物心がつくころにはすでにサーミであることを自覚していたことがうかがえる。そのきっかけは「親から」が６人である。しかし、それ以上に多いのが「その他」であった。その他の内容を書いていない者もいるが、自然と自覚していたとする者が多い。また、トナカイがいるのでサーミであることはすぐにわかったという者もいる。

表７－３－17　あなたはいつごろ、ご自分がサーミであることを自覚しましたか

	～６歳くらい	７～12歳くらい	13～15歳くらい	16～18歳くらい	19歳～	わからない	合計
度数	8	2	1	1	0	4	16
パーセント	50.0	12.5	6.2	6.2	0.0	25.0	100.0

表７－３－18　サーミであることを自覚したきっかけはどのようなことでしたか

	親から	親以外の家族親せきから	近所の人から	友だちから指摘	学校の先生に指摘	身体的特徴	その他	無回答	合計
度数	6	2	1	1	0	0	10	1	16
パーセント	37.5	12.5	6.2	6.2	0.0	0.0	62.5	6.2	100.0

保護者たちの教育歴はかれらの意識に影響を及ぼしているのだろうか。まず最終学歴をみると、大学卒が11人、大学院卒が１人と高学歴化がすすんでいる。基礎学校までという者は２人、高校までという者も２人であった。このうち、基礎学校の１～６年生の間、サーミ学校へ通っていたという者は６人、通っていなかった者は10人である。サーミ学校への通学経験に年齢はあまり関係がない。強い相関があるのは出身地であり、ヨックモック出身の２人はともにサーミ学校へ通っていた。イェリヴァーレ出身の４人は通っていた者と通っていない者が３人ずつであった一方で、キルナ出身の５人はひとりもサーミ学校へは通っていなかった。

サーミの言語や文化を学校で学んでいないという者は１人しかおらず、それ以外はみないずれかの学校段階でサーミについて学んだ経験をもっている。

ここで、サーミ学校へ通っていたかどうか、あるいは学校でサーミ語、サーミ文化を学んだことがあるかどうかがサーミ語能力にいかなる影響を与えているかを調べるため、以下の操作をおこなった。まず、表７－３－11から表７－３－15までの４つの質問に関連して、その回答を得点化し、サーミ語能力得点を計算した[9)]。その得点を、サーミ学校へ通った者とそうでない者などで比較すると、サーミ学校へ通った者の平均能力得点は3.1、基礎学校へ通った者の平均能力得点は3.0であった。また、大学でサーミ語やサーミ文化を習った者の平均能力得点は3.1であり、これもそれ以外の平均点3.0とほぼ差はみられない。高校でサーミ語やサーミ文化を習った者とそうでない者に関しては、3.8と2.6という差がついている。いずれにしても、サーミ語能力に関しては学校での経験などよりも、その他の影響、たとえば家庭環境などの方が大きな影響力をもっているようである。

表７－３－19　あなたの最終学歴はどちらになりますか

	サーミ学校	基礎学校	高校	大学	大学院	合計
度数	0	2	2	11	1	16
パーセント	0.0	12.5	12.5	68.8	6.2	100.0

表７－３－20　あなたは１～６年生の間、どの教育機関に通っていましたか

	サーミ学校	基礎学校	合計
度数	6	10	16
パーセント	37.5	62.5	100.0

最後に、保護者の職業を確認しておこう。現在の職業は教員が４人でもっとも多く、ついで公務員、事務・営業、トナカイ業が３人となっている。トナカイ業については、他の職業との兼業も多いようである。もっとも長く従事している職業では公務員が５人ともっとも多い。ついで教員、トナカイ業が３人であった。

世帯年収は「30 ～ 50万SEK」が７人ともっとも多く、ついで「50万SEK ～」が４人、「10 ～ 30

万SEK」が３人､「10万SEK未満」が１人であった。もっとも高い「50万SEK ～」は事務･営業が２人、店員・販売員と公務員が１人ずつである。逆に世帯収入が低い者の職業は、教員が２人（「～ 10万SEK」と「10 ～ 30万SEK」が１人ずつ)、公務員と無職（学生）である。

表７－３－21　あなたの主たる収入源となっているお仕事は何ですか・もっと長い間従事している仕事は何ですか

	公務員	教員	事務・営業	工員	トナカイ業	店員・販売員	自営業	その他	合計
現在	3(18.8)	4(25.0)	3(18.8)	0(0.0)	3(18.8)	1(6.2)	1(6.2)	1(6.2)	16(100.0)
最長	5(31.2)	3(18.8)	2(12.5)	1(6.2)	3(18.8)	1(6.2)	1(6.2)	0(0.0)	16(100.0)

表７－３－22　現在の世帯全体の年収はどのくらいになりますか

	10万SEK未満	10 ～ 30万SEK	30 ～ 50万SEK	50万SEK ～	無回答	合計
度数	1	3	7	4	1	16
パーセント	6.2	18.8	43.8	25.0	6.2	100.0

第４項　小括

ここまで、サーミ学校の保護者たちの意識をみてきた。その結果、以下の知見が得られた。

第１に、保護者のサーミ語、サーミ文化に対する積極的な思いがみられる。そもそも基礎学校との選択の結果サーミ学校を選んでいる以上、サーミ学校に特有のカリキュラム、すなわちサーミ語やサーミ文化に対する期待が大きくなることはあたりまえともいえる。しかし、サーミ学校の保護者たちは、できるかぎり手を広げ、あれもこれも子どもに身につけさせたいと考えているわけではなく、明確にサーミ語、サーミ文化を学ぶことを重視しているのである。これは､「基礎学力をもっと身につけてほしい」や「もっとスウェーデン語の勉強をしてほしい」といった要望がほとんどみられないことからもうかがえる。そして何より､「英語の勉強をしてほしい」という要望をもつ者が１人しかいない点に、サーミ学校の保護者たちの徹底ぶりが表われている。わが国に限らず、少数言語教育を考える際に必ず議論になるのが、現代のリンガ・フランカとされる英語との関係である。そのようななかで、マジョリティの言語であるスウェーデン語や、国際語である英語の教育よりもサーミ語を重視するという保護者たちの意向は特徴的であるといえる。

第２に、わが国における民族学校に関する議論にひきつければ、サーミ学校を利用することについて、将来への不安といったものがほとんどみられないことに注目できる。先にふれたように、わが国で民族学校が議論される際にマイナス材料としてよく挙げられるのが、進学や就職するうえで不利になるのではないかということであった。ところが、サーミ学校においては、このような懸念はほとんどみられなかった。この背景として、サーミ地域においてサーミ語ができる者にきちんと雇用の機会が与えられていることが考えられる。スウェーデンでは、サーミ地域において行政の窓口に必ずひとりサーミ語話者を配置し、サーミ語による窓口対応をしなければならないと義務づけている。また、第２節で詳しくみたように、サーミ学校はサーミ語を使える教員が不足しているという問題を抱えており、サーミ語学習が進路に結びつく可能性の一例となっている。このような取り組みによって、サーミ学校への進学が進路、就職に不利に働かないと意識されているのであろう。

第３に、保護者たち自身の高いサーミ語能力があげられるだろう。サーミの人々のあいだでは、しばらくのあいだサーミ語は恥ずかしいものであるため話すべきではないという意識が広がっていた。このような風潮は1960年代ころまで続き、その結果、現在の中高年層にはサーミ語がほとんど

分からない者が一定数いるといわれている。それに対し、保護者たちのなかでサーミ語がわからないという者はほとんどおらず、多くが高いサーミ語能力を有していた。ただ、このような能力が学校によって身についたわけではなさそうであることには注目してよいだろう。サーミ学校に通っていたかどうかや、大学でサーミ語・サーミ文化を習ったかどうかは、サーミ語能力にほとんど影響を与えていなかった。サーミの学校教育と、サーミ語、文化の習得に関する検討は、今後の大きな課題であるといえるだろう。

第４節　サーミ工芸学校教員の教育意識

第１項　課題の設定

本節と次節ではヨックモックのサーミ工芸学校で行った教員調査と学生調査の分析を行う。本節ではそのうち、工芸学校教員調査から教員たちの勤務のあり方や教育意識をさぐっていく。

調査は2012年９月に行われた。ヨックモックのサーミ工芸学校においてG教諭とH教諭から直接話しをうかがった。また、その他の教員に対しても、学校を通して調査票を配布し郵送にて返送していただいた。配布した調査票は７票で有効回収数は２票である。本節では、インタビューをした２人と、調査票を回収できた２人の計４人を分析の対象とする。なお、サーミ工芸学校教員に対する調査票は、第２節で使用したサーミ学校教員調査票とは異なるものである。

第２項　工芸学校教員の属性

回答者は男性２名、女性２名である。年齢は、F教諭が40代、G教諭とH教諭が50代、E教諭が60代である。担当科目はE教諭、F教諭、G教諭が工芸、H教諭が語学である。サーミ語にはいくつかの方言があり、スウェーデンでも北サーミ語、ルレ・サーミ語、南サーミ語の３方言が使われている。このうち、最大の話者数をもつのは北サーミ語であり、工芸学校があるヨックモック周辺では北サーミ語とルレ･サーミ語がおもに使われている。H教諭が教えているのは、そのどちらでもなく、スウェーデンでもっとも話者の少ない南サーミ語である。南サーミ語はおもにスウェーデン中部のイェムトランドなどで使われている[10)]。

最終学歴はE教諭が高校で、残りの３人は大学である。E教諭はこれまでの学校においてもサーミ語やサーミ文化を学んだことがとくにないという。F教諭、G教諭、H教諭はそれぞれサーミ学校へ通っているほか、F教諭は高校と大学においてもサーミ文化を学んでいた。ただし、先にみたように対象者の世代が通っていた時代のサーミ学校はサーミ語やサーミ文化を学べる現在のサーミ学校とは異なり、授業もスウェーデン語で行われていた。

対象者は全員が既婚者であるが、１人は離婚しており、また１人は事実婚（再婚）である。相手は３人がサーミであり、H教諭はサーミでない人である。全員に子どもがおり、E教諭、F教諭、G教諭はサーミ学校へ通わせていた。また、H教諭は子どもを基礎学校へ通わせているが、これはH教諭がスウェーデン中部のイェムトランド出身であり、サーミ学校がそもそもないためである。

表７－４－１　対象者の属性

	性別	年齢	担当	学歴	サーミ語・文化を学んだ学校
E教諭	男	60代	木工と角工芸	高校	学んでいない
F教諭	女	40代	工芸	大学	サーミ学校、高校、大学
G教諭	男	50代	木工	大学	サーミ学校
H教諭	女	50代	語学	大学	サーミ学校

表７－４－２　対象者の家族

	相手のエスニシティ	子ども有無	子どもの学校	学校選択の目的・理由
E教諭	サーミ	いる	サーミ学校と基礎学校	サーミ語とサーミとしてのアイデンティティが大事だから
F教諭	サーミ	いる	サーミ学校	NA
G教諭	サーミ	いる	サーミ学校と基礎学校	NA
H教諭	非サーミ	いる	基礎学校	イェムトランドには学校がない。

対象者の育った環境と対象者自身のサーミ語能力についてもう少し踏み込んでみておこう。４人とも、祖父母と、両親あるいはそのどちらかがサーミ語を話すことができるという環境で育ってきている。E教諭、F教諭、G教諭が北サーミ語とルレ・サーミ語を使用することができる。北サーミ語とルレ・サーミ語は言語的に似ており、どちらかができればもう一方も大体わかるのだという。H教諭だけは、これまでにもみたように南サーミ語の話者である。語学担当であるH教諭にかぎらず、サーミ語の能力はおしなべて高い。とくに読むことと聞くことについては全員が「本が読める」「議会のやり取りなどがわかる」と回答している。それに対し書くことはやや難しいようであり、F教諭とG教諭が「簡単なメモが書ける」となっている。また、G教諭は子どものころ、学校でスウェーデン語で授業をし、少しサーミ語を話すとすぐに発音などを注意されたことからスウェーデン語にのりかえてしまおうと考えた経験をしている。それ以来、話すことには苦手意識があり、現在でも学生にサーミ語で話しかけられてもスウェーデン語で返すのがつねになっているという。

表７－４－３　対象者の言語状況

	サーミ語が話せる家族	自分が使えるサーミ語	話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
E教諭	実母、実父、祖父母	北サーミ語、ルレ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
F教諭	実母、祖父母	北サーミ語、ルレ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	簡単なメモが書ける
G教諭	実父、祖父母	北サーミ語、ルレ・サーミ語	簡単な内容なら話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	簡単なメモが書ける
H教諭	実母、実父、祖父母	南サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける

教師になった年は、H教諭がもっとも古く1974年、F教諭が1999年である。現在の学校へ赴任したのはG教諭が1990年でもっとも古く、F教諭は2012年に赴任したばかりである。ただし、G教諭は1990年以来工芸学校にずっと勤めているわけではなく、1990年から92年まで教員資格をもたないままに工芸学校で工芸を教え、その後教員資格をとるために一度やめている。その後、再び工芸学校で教壇にたち、基礎学校で工芸の教員として働いた時期を挟んで2007年にみたび工芸学校で教員をすることになった。また、E教諭も1976年から教員をしているものの、もっとも長い間従事している仕事は自営業であるなど、必ずしも教員をずっと続けているわけではない。なお、F教諭とG教諭はスウェーデンの小学校教員免許を、H教諭はスウェーデンの幼稚園教員免許と、スウェーデン

ならびにサーミの保育士資格をもっている。E教諭は特に免許、資格はもっていない。

F教諭、G教諭、H教諭は学校のすぐ近くに住んでいるが、E教諭は通勤距離を250kmと回答している。この点に関してはとくに記述がないので詳細は不明であるが、たとえばH教諭は工芸学校で仕事をしつつ、月に１回、３日ほどの日程でヨックモックから400km近く離れたターナビーのサーミ学校へ通ってサーミ語を教えているという。E教諭もこのような働き方で工芸学校へ来ているのかもしれない。

サーミ学校で働くことにした理由としては、G教諭とH教諭が「教育に携わりたかったから」と回答している。また、H教諭とF教諭は共通して「これまでのキャリアが生かせるから」「サーミ文化に関われるから」「サーミのために働けるから」と回答している。F教諭はこれに加えて「金銭的な魅力があったから」としている。E教諭は「伝統的なサーミ工芸教育」と回答しており、サーミ文化に携われ、また働けることが魅力であったことがわかる。

年間世帯収入はE教諭とH教諭が10万～30万SEK（130～400万円）、F教諭とG教諭が30～50万SEK（400～700万円）である。この額についてはE教諭が「満足」、残りの３人が「どちらかといえば満足」と回答している。F教諭は、「サーミ工芸家としての生活は厳しいが、その代わりに人に工芸を教えることができる」と回答しており、金銭的な問題以上のやりがいをこの仕事に求めていることがみてとれる。なお、４人の生活に対する満足度は全般に高く、仕事内容は全員が「満足」、G教諭を除いては地域の環境と生活全般も「満足」としている。

表７－４－４　所有免許、教師になった経歴

	所有免許	教師になった年	現在の学校	もっとも長く従事した職業	通勤距離（km）
E教諭	とくになし	1976	1998	自営業	250
F教諭	スウェーデンの小学校教員免許	1999	2012	教員	4
G教諭	スウェーデンの小学校教員免許	1990	1990	教員	2
H教諭	スウェーデンの幼稚園の教員免許・保育士資格、サーミの保育士資格	1974	2004	教員	1

表７－４－５　サーミ学校で働く理由、年間世帯収入

	サーミ学校を選んだ理由	年間世帯収入
E教諭	その他（伝統的なサーミ工芸教育）	10～30万SEK
F教諭	金銭的に魅力があったから、これまでのキャリアが生かせるから、サーミ文化に関われるから、サーミのために働けるから、その他	30～50万SEK
G教諭	教育に携わりたかったから	30～50万SEK
H教諭	教育に携わりたかったから、これまでのキャリアが生かせるから、サーミ文化に関われるから、サーミのために働けるから	10～30万SEK

表７－４－６　現在の生活の満足度

	仕事内容	収入	地域の環境	生活全般
E教諭	満足	満足	満足	満足
F教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
G教諭	満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
H教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足

第３項　サーミ工芸学校とサーミ教育への評価

工芸学校の教師たちは工芸学校をどのように評価しているのだろうか、また、サーミの教育全般に対しどのような意識をもっているのだろうか。サーミ工芸学校に関する評価を表７－４－７にま

とめている。表の一番右側「平均」の列は、それぞれの項目に対する４教員の評価を４段階で数値化した際の平均値である。「A：専門的な知識や技術が得られる」「D：サーミの文化を身につけられる」「F：学生にサーミの友人ができる」「I：もっと公的な支援が欲しい」に対しては、全員が「とてもそう思う」と回答している。スウェーデン国内のあらゆる地域でマイノリティとなるサーミの人々にとって、とくに「F：学生にサーミの友人ができる」ことは工芸学校の重要な機能のひとつとして認識されている。G教諭の言葉を借りれば、工芸学校は結婚相手をみつけるための「マッチメーカー」、あるいは「縁結びの機関」でもあり、実際にG教諭の両親も工芸学校時代に知り合い、結婚したのだという。

「B：サーミ語を身につけられる」「C：サーミ語で学ぶので理解しやすい」についてはE教諭とH教諭が「とてもそう思う」、F教諭とG教諭が「少しそう思う」と回答している。G教諭によると、工芸のコースに来る学生は「言語だとか文化というのには、あまり興味を示さない」という。そのため、G教諭のなかではサーミ語よりもサーミ工芸の伝承の方が評価すべき対象となるようだ。

一方で、H教諭はそれとまったく異なる見解をもっている。H教諭によるとサーミ語のなかには「スウェーデン語にはない言葉」がたくさんあり、それが文化と密接に結びついている。たとえば雪の状態に関しても、「状態、溶け具合、あるいは降り具合、どれくらい降ったら南に来るとか」を示す言葉が多く存在するのだという。また、サーミの文化、生活と切り離すことができないトナカイ業においても、その作業の中に「スウェーデン語ではできない、サーミ語だけでしか表現できないことがたくさん」あるという。H教諭はこのことがトナカイ業の重視、そしてサーミのアイデンティティ形成におけるサーミ語の重要性を呼び覚まし、かつてのサーミ語やサーミの復興活動へと結びついたと考えており、それがサーミ語を身につけられることの重要性、サーミ語で学ぶことの重要性を強調する意識へとつながっているのだろう。

「E：就職するのに便利」については、F教諭が「少しそう思う」としているほかは３人とも「とてもそう思う」と回答している。G教諭によると、工芸学校の学生の中には高校卒業後のサバティカル期間を利用して来ているものが多い。それらの学生が工芸学校で工芸やサーミ語について学び、また、サーミの友人とつきあっていくなかで、もっとサーミについて発見したいという気持ちを強め、大学などへ進学していくのだという。このように、サーミについて学ぶことは就職や進路への意識を強くさせていると評価しているようである。

「G：サーミ以外の人々との関わりが薄くなりそう」については各教員の評価がわかれている。H教諭は、これまでサーミとほとんど関わることのなかった学生たちが、工芸学校でサーミの学生同士の時間をもつようになることで、必然的にサーミ以外の人々と関わる時間は減っていくと考えている。またE教諭も「少しそう思う」と回答している。G教諭とF教諭はそのようには考えていない。

表７－４－７　工芸学校に関わる以下の項目についてどのようにお考えですか

	E教諭	F教諭	G教諭	H教諭	平均
A　：専門的な知識や技術が得られる	1	1	1	1	1.0
B　：サーミ語を身につけられる	1	2	2	1	1.5
C　：サーミ語で学ぶので理解しやすい	1	2	2	1	1.5
D　：サーミの文化を身につけられる	1	1	1	1	1.0
E　：就職するのに便利	1	2	1	1	1.3
F　：学生にサーミの友人ができる	1	1	1	1	1.0
G　：サーミ以外の人々との関わりが薄くなりそう	2	4	3	2	2.8
H　：設備が不十分である	4	2	2	2	2.5
I　：もっと公的な支援が欲しい	1	1	1	1	1.0

注）１＝とてもそう思う、２＝少しそう思う、３＝あまりそう思わない、４＝まったくそう思わない

E教諭、F教諭、G教諭の３人は、工芸学校の現在のあり方に満足をしているようであり、今後のあり方についても「このままでよい」と答えている。一方でH教諭は、２つの側面から工芸学校の拡大を望んでいる。１つ目の側面は、地理的な問題である。南サーミ語圏出身であるH教諭は、南サーミ語教育の拡充と、地方都市の人たちにも通いやすいだけの学校数の拡充を希望している。語学だけではなく、工芸に関しても南サーミ語話者たちの伝統工芸があるようであり、それらを学ぶ課程をつくることは重要である。また、もう１つの側面として、大学レベルの教育を行いたいという希望をもっている。現在、工芸学校は２年コースを基礎としている。しかし、３年、４年と学び続けられるコースがあってもよいのではないかとH教諭は発言している。

H教諭のこのような思いは、サーミ学校制度全般に対しても向けられている。工芸学校に限らないサーミ学校の今後の展開としては、４人全員がサーミ大学の設置までをも希望している。第１節でも確認しているように、サーミ学校は基礎学校の６年間しか設置されていない。基礎学校の上級学年や高等学校でも、母語教育としてサーミ語の教育を受けたり、また一部の学校においてサーミ文化を学んだりすることはできるし、またいくつかの大学はサーミ語を学ぶ学科を設置している。しかし、これだけでは足りないというのが４人の共通した見解であるようだ。G教諭の発言の中にも、H教諭の発言の中にも、隣国ノルウェーの教育制度、そしてカウトケイノのサーミ大学の話がよく登場する。少なくともノルウェー並の教育体制を整えることが要求されているようである。

サーミ学校への進学形態については教員間でも意見がわかれている。F教諭とG教諭は現状の希望者のみが進学する形でよいとしている。E教諭とH教諭は、原則としてサーミの子弟は全員サーミ学校へ通うべきであると考えている。H教諭は「現実的には絶対無理なので」と断ってはいるものの、サーミの文化や言語、歴史などをきちんと学んでいく、そして学ぶ権利を保障するという意味においても、サーミ学校を通じて機会が全員に行き渡ることを望んでいるのである。

表７－４－８　サーミ工芸学校・サーミ学校の今後について

	今後、工芸学校を	理由	サーミ学校の展開	サーミ学校の受け入れについて
E教諭	現状でよい	サーミのらしさが第一線に置かれるから	大学も作るべき	原則としてサーミ学校へ進学するようにすべき
F教諭	現状でよい	NA	大学も作るべき	このままでよい
G教諭	現状でよい	NA	大学も作るべき	このままでよい
H教諭	増やすべき	南にも入りやすいものがあってよい。ノルウェーにはたくさんある。	大学も作るべき	原則としてサーミ学校へ進学するようにすべき

G教諭以外の３人は、現在サーミの人々との交流が生活の中心となっている。今回の調査対象者である４人は、サーミ語やサーミ文化がスウェーデン社会だけでなくサーミの人々の中でも否定的に扱われる時代を経験している。G教諭曰く「サーミの失われた世代」であったことが、サーミであることに誇りがもてるヨックモックという町や現在の状況に対する高い評価を与えていると考えられる。サーミの素晴らしさやサーミの教育に関する自由回答には「アイデンティティ」という言葉が頻出する。サーミの言語や､工芸に代表される文化を学ぶことを通じて､学生個々が自分のサーミとしてのアイデンティティを確立していくことに、工芸学校の一番の価値が見出されている。

表７－４－９　サーミの人々との交流・サーミのすばらしさ・サーミの教育について

	サーミの人々との交流	サーミの素晴らしさ	サーミの教育について
E教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	自分のアイデンティティがあること	自分のアイデンティティをサーミ語、伝統的サーミ工芸、ヨイク（サーミ伝統的歌唱）、サーミ文字を通して強めること
F教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	NA	
G教諭	サーミの人々、サーミ以外の人々共同じくらいつきあっている	NA	
H教諭	サーミの人々とのつきあいが多い	育った環境とか説明しなくてもそのまま生きていけるのはすばらしい。	あらゆる青少年にいえることだが自分のアイデンティティを主張していける。恥じたり迫害されたりすることのない教育をすべきである。誇りを持って次世代に伝えられる。

第４項　小括

以上、工芸学校教師の工芸学校、サーミ教育に対する意識をみてきた。そのうえで明らかになった知見を最後にまとめておきたい。

本調査からみえてきたサーミ工芸学校の特徴として、１点目にサーミ語やサーミ工芸の技術の伝達にとどまらない多様な役割を果たしていることがわかった。それは、第１に語学や工芸の技術を身につけることにより、サーミとしてのアイデンティティを強く自覚することであったり、第２に学生同士の幅広い交友関係を構築することであったりする。とくに後者については、スウェーデンのどの地域においてもマイノリティにならざるをえないサーミの子弟がマジョリティになれる場として、向学心やアイデンティティの確立にもつながっていくことが期待されていた。

２点目に、工芸学校の教員たちは学校の実践に対して高い満足と誇りをもっているが、サーミ教育全般に関してはまだまだ足りない部分があると考えている。とくに、サーミ学校が基礎学校の中級段階までしかないことについては不満が多く、中等教育段階から大学までのサーミ教育の整備を求める声が強かった。また、制度だけではなく、工芸学校のカリキュラムについても、もっと増やしたほうがよいと考える意見がある。２年制カリキュラムの見直しも含め、サーミ語や文化についてまだまだ教えられること、学ぶべきことがあるようだ。

３点目に、第２節でも明らかになったサーミの中の多様性に対する配慮の不足については、工芸学校においても例外ではないことがうかがえた。ヨックモックという土地柄から、ルレ・サーミに対する配慮はそれなりにあるようであるが、南サーミへの配慮となるとまだまだ不足しているといわざるをえない。また、南サーミ出身であるH教諭によれば、これは単に言語だけの問題にとどまらず、工芸などの面においても配慮が必要であるという。

４点目に､これも第２節における知見と関連し､工芸学校の教師においても｢サーミ社会の勝ち組｣という側面は見出せた。工芸学校の教師はその特色上、「芸術家」である場合が多い。そして、どの社会においてもそうであるように、制作だけで生活ができる「芸術家」はごく一部である。その

ようななかで工芸学校の教師は、F教諭の「サーミ工芸家としての生活は厳しい」という言葉に象徴されるように、その技術を生活の糧とできた例外的な「芸術家」であるといえる。G教諭の話からも、卒業生は必ずしも工芸の道に進めるわけではないことが示されている。工芸学校という枠組みで語れるものではないが、この学校で得た技術が生活の糧とできるシステムの確立が今後のサーミ社会の大きな課題となるのだろう。

第５節　サーミ工芸学校学生の学校生活と民族意識

第１項　高等教育機関としてのサーミ工芸学校

サーミ工芸学校は、スウェーデンのサーミの人々にとって国内唯一の高等教育機関である。サーミの子どもに対する初等教育が、サーミの文化や生活様式の基礎を学ぶとするならば、サーミ工芸学校は、それらを専門的に学び、サーミ文化を次の世代に受け継ぐ役割の担い手を養成する教育を行う機関である。

サーミ工芸学校[11] は、1943年にヨックモックに設立された。最初の30年間は国立学校として運営され、その後は学校法人として経営されている。校長は「私たちが重要だと思っているのは、家庭におけるサーミの民族知が断ち切られてしまったので、サーミ文化を再発見する場所としてこの学校が機能すること」と述べている。

入学資格は18歳以上で、年齢の上限はない。学科は、工芸学科、トナカイ業学科、サーミ語学科、サーミ語通訳学科、食物学科がある。工芸学科は、トナカイの皮や角、木工加工などのサーミの伝統工芸を学ぶ。トナカイ業学科は、すでにトナカイを所有している人たちがターゲットである。それらの人々は遊牧をしているので、通学可能な時期やインターネットを使って勉強している。サーミ語学科は、北サーミ語、ルレ・サーミ語、南サーミ語などのウェブを用いて学習している。サーミ語通訳学科は、通訳の教育をしている。食物学科ではサーミの料理法を学び、家庭料理としてだけでなく、フードビジネスにつなげることもできるような学習を行っている。

表７－５－１　サーミ工芸学校の学科と定員

	工芸学科	トナカイ業学科	サーミ語学科	サーミ語通訳学科	食物学科
定員（人）	25	40～80	40～50	6	不明

工芸学科、トナカイ業学科はサーミでなければ入学できず、全学生の90％はサーミである。また、教職員等のスタッフは全員サーミである。毎年５～10人はノルウェーやフィンランドから学生が入学している。2010年には定員が25人の工芸学科に55人の応募があったが、地域と年齢を考慮して割り振っている。入学は順番待ちになっている状態である。

これらのことから、この学校の学生は、入学を希望する時点で、サーミとしての意識や、卒業後にサーミの文化を受け継ぐという意味でのポテンシャルを有していると考えられる。いわば「伝統を受け継ぐ主体となる若者たちの集団」であるといえるだろう。そのため、サーミ工芸学校の学生を対象としてその意識を探ることは、サーミのアイデンティティ形成や職業意識に、これまでの生活経験や教育はどのように寄与しているかを考察するための手がかりになると考えられる。

第２項　調査の概要と対象者の基本的属性

ここで使用するデータは、2012年９月、サーミ工芸学校の学生を対象に実施した調査結果である。調査は２つの方法で実施された。１つは、質問紙によるアンケート調査、もう１つは、質問紙にもとづく半構造化インタビューである。前者の調査は留置法によって行われ、28票配布し12人から有効な回答を得ることができた（回収率42.9%）。後者は３人へのインタビューが実施できた。これらを合わせた質問紙15票とインタビュー３件が分析の対象である。

本調査において回収できた15票はいずれも工芸学科の学生であった。調査時がトナカイ業のハイシーズンであったこと、サーミ語学科は遠隔授業が中心であることから、このような結果になっている。学年の内訳は、１年生が12人（80.0%）、２年生が３人（20.0%）だった。また、性別は女性が14人（93.3%）、男性が１人（0.7%）、年齢幅は19歳から23歳であり、19歳が２人、20歳が５人、21歳が３人、22歳が１人、23歳が４人だった。出身国については、スウェーデンが13人（87.0%）、ノルウェーが２人（13.0%）だった。

なお、インタビュー対象者３人の語りは、<F1>（女性、１年生）、<F2>（女性、２年生）、<M1>（男性、１年生）のように表記する。

表７－５－２　対象者の学年と性別　　単位：人

	１年生	２年生	合計
女性	11	3	14
男性	1	0	1
合計	12	3	15

第３項　サーミ工芸学校入学前の経験と入学動機

サーミ工芸学校入学前での高等教育機関経験については、「大学で学んだ」が１人（0.7%）、「高等教育機関で学んだことはない」が14人（93.3%）であり、就労経験の有無については、「就労経験あり」が13人（87.0%）、「就労経験なし」が２人（13.0%）だった。就労経験がある13人に、もっとも長い間従事していた仕事について聞いたところ、「保育士」が６人（23.1%）でもっとも多く、次いで「店員･販売員」が５人（19.2%）、「トナカイ業」が３人（11.5%）、「公務員」２人（7.7%）、「教員」、「会社の事務や営業職」、「自営業」がそれぞれ１人（3.8%）、「その他」が７人（26.9%）であった（複数回答）。

サーミ工芸学校に進学した理由としては、「家業を継ぐため」がもっとも多く12人（80.0%）、次いで「専門的な知識や技術が得られるから」が10人（66.7%）、「サーミ文化を学びたい」と「サーミ語の力を高めたい」がそれぞれ９人（60.0%）であった（表７－５－３）。また、サーミ工芸学校への進学を勧めたのは誰かについては、「自分で選んだ」がもっとも多く12人（80.0%）、次いで「親戚」８人（53.3%）、「友だち」６人（40.0%）だった（表７－５－４）。

<M1>

両親というわけじゃなくて、父方の祖父が手工芸で、いとこもそれをやっているので、（サーミ工芸学校に進学しようと）思いました。（中略）両親は、別にやってはいなかったんですけれども、家庭には身の回りにそういうものがいくつもあったし…。

表７－５－３　サーミ工芸学校に進学した理由（複数回答）

単位：人、％

就職に有利だから	1	6.7%
進学に有利だから	0	0.0%
専門的な知識や技術が得られるから	10	66.7%
資格が得られるから	3	20.0%
家業を継ぐため	12	80.0%
家族や親族も通っていたから	8	53.3%
実践的な教育が充実しているから	2	13.3%
自分がサーミだから	8	53.3%
サーミ文化を学びたいから	9	60.0%
サーミ語の力を高めたいから	9	60.0%
サーミ同士の交流を深めたいから	7	46.7%
その他	1	6.7%

表７－５－４ サーミ工芸学校への進学を勧めたのは誰か（複数回答）

単位：人、％

自分で選んだ	12	80.0%
親	3	20.0%
きょうだい	3	20.0%
親戚	8	53.3%
それまで通っていた学校の先生	1	6.7%
友だち	6	40.0%
先輩	4	26.7%
近所の人	0	0.0%
その他	0	0.0%

第４項　サーミ工芸学校での教育と生活

これまでのサーミ工芸学校での生活の満足度については、「授業の内容」「専門的な知識や技術の獲得」、「学生同士の交流」、「先生との交流」のいずれもが「満足」と「やや満足」を合わせると100％である。それらの満足度に比べ、「サーミ語の力の向上」については、「満足」が５人（33.3％）に留まっているものの、全般的に満足度は高い（表７－５－５）。しかし、これは、入学して間もない１年生の回答が大半であることから、サーミ工芸学校への期待感も含んだものであるといえるだろう。

表７－５－５ サーミ工芸学校での生活の満足度　　単位：人、％

	満足		やや満足		やや不満		不満	
授業の内容	11	73.3%	4	26.7%	0	0.0%	0	0.0%
専門的な知識や技術の獲得	11	73.3%	4	26.7%	0	0.0%	0	0.0%
サーミ文化への理解の深まり	10	66.7%	4	26.7%	1	6.7%	0	0.0%
サーミ語の力の向上	5	33.3%	8	53.3%	2	13.3%	0	0.0%
先生との交流	9	60.0%	6	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
学生同士の交流	11	73.3%	4	26.7%	0	0.0%	0	0.0%

サーミ工芸学校に関わる考えについては、「専門的な知識や技術が得られる」、「サーミの友人ができる」について「とてもそう思う」という者の割合がもっとも高く、専門的な学びのみならず、私的な人間関係の充実も期待していることが表われていた。一方で、「サーミ以外の人々との関わりが薄くなりそう」については、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と答えた者が多く、サーミ工芸学校での学びによって、他の人々との関係性が閉じられたものになるとは考えていないことが理解できる（表７－５－６）。

<M1>

ここに来て初めて、マジョリティーだという認識は、とってもいい気持ちだし、逆にみんなと一緒で同じカルチャーについてしゃべったりできることも、とてもいいチャンスだと思う。

<F1>

こう言ったらドラマチックに聞こえるかもしれないけど、劇的に、ここに来て私はね、マジョリティーに属している。そういう強い感じがした。

表７－５－６ サーミ工芸学校に関わる考え　　単位：人、％

	とてもそう思う		少しそう思う		あまりそう思わない		まったくそう思わない	
専門的な知識や技術が得られる	14	93.3%	1	6.7%	0	0.0%	0	6.7%
サーミ語を身につけられる	8	53.3%	6	40.0%	1	6.7%	0	6.7%
サーミ語で学ぶので理解しやすい	7	46.7%	6	40.0%	2	13.3%	0	6.7%
サーミの文化を身につけられる	11	73.3%	4	26.7%	0	0.0%	0	6.7%
就職するのに有利	3	20.0%	9	60.0%	3	20.0%	0	6.7%
サーミの友人ができる	14	93.3%	1	6.7%	0	0.0%	0	6.7%
サーミ以外の人々との関わりが薄くなりそう	1	6.7%	1	6.7%	8	53.3%	5	6.7%
設備が不十分である	0	0.0%	1	6.7%	7	46.7%	7	6.7%
サーミ工芸学校に、もっと公的な支援が欲しい	9	60.0%	4	26.7%	2	13.3%	0	6.7%

その上で、今後サーミ工芸学校を、どのようにすべきだと考えるかを聞いたところ、「増やすべき」が12人（80.0%）、「現状でよい」が３人（20.0%）であり、「なくすべき」という回答はなかった。「増やすべき」と考える理由についての自由記述には、「サーミ地域全域のサーミが出会い、集える場所を持つことが大切である」「より多くの者がサーミ工芸学校で学べるように。より広いネットワーク」「私たちの言語や文化がふれる地域や分野は多ければ多いほど良い。多くのサーミの若者は自分たちの受け継ぐ文化遺産に参与することにより、自分たちのサーミとしての認識・確認の機会につながっていることがわかっている。残念ながら、サーミの子どもには家庭でサーミ語を話さないで育ち、地域の言語でもそれを使わない者が多い。ご存知のとおり、サーミ語の方言は数多く、工芸学校がいくつもあれば、文化の一端にふれ、学びたい人々すべてが近づくことができる」というものがあった。また、「志望者の多くが入学できないでいる」という指摘もなされていた。

また、在学中の生活は奨学金が支えており、定期的な収入の有無について、「ある」と答えた13人（86.7%）全員が「奨学金」を利用している。一方、定期的な収入が「ない」者は２人（13.3%）だった。収入のある者は「奨学金」のほかには、「家族からの仕送り」と「自身の就労による収入」がそれぞれ１人、「その他」は１人で、その内訳は「貯蓄」であった（複数回答）。また、現在の世帯全体の年収（税込）は、「10万SEK未満」が３人（20.0%）、「10 ～ 30万SEK未満」が１人、「30 ～ 50万SEK未満」はおらず、「50 ～ 70万SEK未満」が１人（6.7%）であり、８人（53.3%）は無回答であった。

第５項　サーミ工芸学校の卒業後

サーミ工芸学校卒業後の進路の予定については、「進学」が６人（30.0%）、「就職」が２人（10.0%）、「家業を継ぐ」が２人（10.0%）、「未定」が８人（40.0%）、「その他」が２人（10.0%）であった（複数回答）。この中には、卒業後、さらに進学してから働くという者や、働きながら勉強したいとい

う者も含まれており、進学と就職が必ずしもパラレルなものではないと捉えていることがうかがえる。

<M1>

やっぱり、勉強を続けて、たとえば大学とかで勉強したほうがいい職業に就けるという可能性も膨らむと思うし、それと同じに、トナカイ業とかももちろん携わっていきたいと思うし。（中略）僕は、自分のトナカイもいますから…。

一方で、進学先の国・地域、具体的な学校名、勉強する内容については、未定としている者がほとんどであり、一部、記述があったものとしては、進学先の国としてスウェーデン、勉強する内容としては「南サーミ語」「自然、宗教」などがあった。また、就職する場合の仕事の内容としては、「言語関係」「獣医、歯科医師、社会福祉士」などがあったが、まだ具体的な将来展望は描けていないのかもしれない。「未定」には、「就職できてトナカイ業との兼業ができれば」「トナカイ業の会社をつくる」というものがみられた。

<F2>

３年前にジムナシエット（注・高校）を終えて、今ここに来てかれこれ２年目なんです。来年の春にここを卒業して、そのトナカイ業を私は始めようと思っています。（具体的には）トナカイを飼わなきゃいけないんですけれども、それを飼うだけじゃなくて、そのトナカイを使ったお肉の販売ですとか、手工業製品とか、そういったものを扱う会社をしていきたい。

将来の住まいとしては、「出身地」が６人（40.0%）、「学校のあるヨックモック」が１人（6.7%）、「出身地やヨックモック以外のサーミの集住地」が１人（6.7%）、「サーミ集住地以外の場所」が７人（46.7%）であった。

まず、将来の住まいを「出身地」と考える理由については、「出身地は高山や自分のトナカイに近く、親しみがあり好きな場所だから」「そこがいつまでも私の故郷だから」といったものがあげられた。「出身地やヨックモック以外のサーミの集住地」と考える理由については、「工芸学校に入学する前の３年間ノルウェーで働いた。そこが自分の家のように感じられる。私が住み着きたい町には教育機関がある」という記述があった。また、「サーミ集住地以外の場所」と考える理由については、「一定の地域に結びつきはなし。できればスウェーデン各地をあるいは世界を巡って、色々な発見をし、色々な職業を試したい」というものであった。

第６項　血筋・サーミ語・文化とサーミとしての意識

婚姻については、「未婚」が９人（60.0%）、「同棲」が２人（13.3%）、「その他」が４人（26.7%）であり、「その他」のうち３人が「恋人がいる」、「恋人未満が１人」という記述であった。同居している家族については、「１人」が４人、「２人」が３人、「３人」が１人、「５人」が２人、無回答が５人だった。また、同居していない家族は、「いない」が４人、「１人」が２人、「20人」が１人、無回答が８人だった。

サーミの血筋については、「実母」が11人、「実父」が10人、「祖父母」が10人であった（複数回答）。父母ともにサーミである者が６人、さらに祖父母もサーミである者は４人であった。父母と祖父母にサーミがいない者はいなかった（表７－５－７）。父母ともにサーミであって、祖父母がサーミではないということは考えにくいが、祖父母あるいは継父母がサーミであるかどうかを本人が知らないという可能性もある。

表７－５－７　サーミの血筋　　単位：人、％

実母・実父・祖父母	4	26.7%
実母・実父	2	13.3%
実母・祖父母	3	20.0%
実父・祖父母	3	20.0%
実母のみ	2	13.3%
実父のみ	1	6.7%
合計	15	100.0%

また、サーミ語を使える家族については、「実母」が５人、「実父」が８人、「祖父母」が11人であった。先にみた、サーミの血筋とサーミ語が使えることとの関連では、サーミの血筋である「実母」11人のうち、サーミ語を使うことができる者は４人であり、サーミの血筋である「実父」９人のうち、サーミ語を使うことができる者は８人であった。また、サーミ語を使える「実母」５人のうち４人はサーミであるが、１人はサーミの血筋ではなく、配偶者がサーミであった。一方、サーミ語を使える「実父」８人については、全員がサーミの血筋をひいていた。

また、家族が使えるサーミ語は、「北サーミ語」が７人、「ルレ・サーミ語」が６人、「南サーミ語」が２人、「その他のサーミ語」が３人であった。「その他」の具体的な記述としては、「イェリヴァーレの方言（南サーミ語とルレ・サーミ語の混合）」があった（複数回答）。

一方、調査対象者自身が使えるサーミ語については、「北サーミ語」が８人、「ルレ・サーミ語」が９人、「南サーミ語」が１人、「その他のサーミ語」が１人、「サーミ語は使えない」が１人であった。何らかのサーミ語を使える14人のうち、もっとも得意なサーミ語の能力については、表７－５－８の通りである。話す、読む、聞く、書く、いずれの能力についても、ほとんど不自由しないレベルであることがわかる。しかし、それでもなお、サーミ語を「習いたい」と希望する者が７人であった。その他は、「すでに習っている」が５人、「十分なサーミ語能力があるので、習う必要はない」が３人であった。

<F1>

お母さんが言っている「お座りなさい」とか「これはじめましょう」とかいうのは全部わかったけど、もっと流暢に話せるように、ルレ・サーミ語をやりたいと思います。

<F2>

サーミ語は、うちでもサーミ語ですし、小中高でもサーミ語を。キルナでサーミの学校に通っていました。（サーミ学校は小学校までだが？）（７年生から９年生は）コミューンの学校でサーミの人のためにサーミ語と、サーミ語でサーミの歴史を習う授業がありました。

<M1>

父方のおばあちゃんはルレ（・サーミ語）で、お父さんのパパはウメオのサーミ語、僕はルレ・サーミ語だけ勉強したし、しゃべります。（中略）僕の母語といったらスウェーデン語になるので、そのおばあちゃんに会いに行ったときにはサーミ語をしゃべる機会があるんだけれども、うちでいつもしゃべっているわけではないから、やっぱり勉強はしたいと思って。（中略）お父さん方のおばあちゃんが僕のずっと先生でした。（サーミ）学校には行かなかった。（おばあちゃんは）勉強したらおやつ上げるわよって、うまくおばあちゃんに。大きくなってきたら、もう自分から習いたいと思って行くようになりました。子どものころはお菓子で（つられて）。

表７－５－８　もっとも得意なサーミ語の能力　　単位：人、％

	流暢に話せる		かなり話せる		簡単な内容なら話せる		ほとんど話せない		合計	
話すこと	5	35.7%	5	35.7%	3	21.4%	1	7.1%	14	100%
	本が読める		簡単な雑誌が読める		文字が読める		何も読めない			
読むこと	5	35.7%	5	35.7%	3	21.4%	1	7.1%	14	100%
	会議のやり取りなどがわかる		日常生活の話題がわかる		基本的なことならわかる		ほとんど何もわからない			
聞くこと	3	21.4%	6	42.9%	4	28.6%	1	7.1%	14	100%
	どんな文書でも書ける		簡単なメモが書ける		文字がいくつか書ける		何も書けない			
書くこと	4	28.6%	9	64.3%	1	7.1%	0	0.0%	14	100%

自分をサーミとして意識することがあるかという問いについては、「ある」が14人、無回答が１人であった。その具体的な場面（複数回答）については、「家族でサーミの文化を実践するとき」がもっとも多い12人（80.0％）であるが、サーミの文化や言葉にふれるときは全般的に意識する者が多いことがわかる（表７－５－９）。一方で、「サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき」は４人（26.7％）と少なかった。

<F2>

ずっとトナカイ業が身近にあったので、それこそ家事をするにしてもごはんを作るにしても、しゃべるとかそれに関する自然も、いつも身近にありました。

<F1>

母がこの学校（の卒業生）なんです。工芸をやる人で、私が小さいころは（母が）家で工芸をしているときに、子どもたちも私たちも皮を磨いたり、そういうふうな作業をさせてもらって、それを体験して来ているわけです。

私はここ（ヨックモック）で生まれたんですけれども、育ったのはストックホルムなんです。（中略）ストックホルムという環境の中で暮らしていたから、自分がサーミであるということは、ある意味でしっかり分かるって、自覚ができることが多かったんです。

<M1>

生まれたボーロスというところは、南なので全然サーミの文化なんか周りになくて…。

夏は、６月ぐらいから８月ぐらいは、山というか郊外の自然の中にいるので、そこでいろんなことを学んでいます。魚も釣るし、親戚もそこに集まってきて一緒に暮らして、ご飯をつくったりとか、いろいろサーミの生活をします。

表７－５－９　自分をサーミとして意識するとき（複数回答）

単位：人、％

家族でサーミのことを話題にするとき	8	53.3%
家族でサーミの文化を実践するとき	12	80.0%
家族以外のサーミの人々と関わるとき	10	66.7%
サーミ以外の人々と関わるとき	10	66.7%
サーミの文化や歴史に触れたとき	10	66.7%
サーミ語に触れたとき	10	66.7%
サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき	4	26.7%
サーミであることで差別を受けたとき	8	53.3%
その他	1	6.7%

子どものころの家族のなかでの、サーミの伝統文化（生活様式など）の体験については、「ある」が13人、「ない」が１人、無回答が１人だった。体験の内容については、下記の記述があった。

・トナカイ業
・食べ物
・サーミの集まり、サーミチャンピオンシップ、大会、集会など、４回くらい。
・生まれてからずっと、父はトナカイ業、自分もトナカイの持ち主。
・生まれてからずっと父はサーミでトナカイ業者、両親ともトナカイ業。自然と家畜から得て利用できるものをどのように扱うかも教えられてやってきた。伝統や習慣も当然のことと考えられるもののいくつかも身に付けてきた。

子どものころの、サーミとの交流については、「盛んに交流していた」が10人、「必要に応じて交流していた」が１人、「あまり交流していなかった」が３人、「まったく交流していなかった」者はいなかった。

子どものころのサーミ以外の方との関わりについては、「仲良くつきあっていた」が11人、「よくけんかをしていた」が１人、「いじめられた」が１人、無回答が２人だった。

<M1>

友だちとサーミについて話したりとか、結局サーミだろうが、スウェーデン人だろうが、あるがままに生きていくということが基本だと思う。

（友だちは）僕がしゃべる前はあまり（サーミだと）気にもしなかった､知らなかったけれども､僕がしゃべることによってそういう人たちがサーミのことを知るようになった。彼らは、僕の周りのスウェーデン人は、そういう違うことを聞くのを、楽しいとか､「へえ」と興味をもってくれるから。

小学校１～６年生の間の教育機関については､「サーミ学校」が５人､「基礎学校」が９人､「サー

ミ学校と基礎学校の両方」が１人であった。サーミ学校に通った理由としては、「イェリヴァーレ出身、そこに住んでいた。サーミ学校があり、両親はサーミ語のある環境で勉強させ、将来に向けてサーミの絆を結ばせたかった」「他のサーミたちとつきあい、サーミ語を話せるように」という記述があった。一方、基礎学校に通った理由としては、「他に通う学校がなかった」「(住んでいた地域には)サーミ学校がないから」というものが記述され、「隣村に学校があった。小さい頃はあまりサーミ語を使ったりはしなかった」という。両方の学校に通ったという回答は、引っ越しにともなうものであった。

表７－５－10　自分をサーミとして自覚した時期

単位：人、％

基礎学校入学前から（～６歳くらい）	7	46.7%
基礎学校初級・中級学年のころ（７～12歳くらい）	1	6.7%
基礎学校上級学年のころ（13～15歳くらい）	1	6.7%
高校生のころ（16～18歳くらい）	0	0.0%
高校卒業以降（19歳～）	0	0.0%
いつごろかわからない	6	40.0%
合計	15	100.0%

自分がサーミであることを自覚した時期については、「基礎学校入学前から（～６歳くらい)」がもっとも多く７人、次いで「いつごろかわからない」が６人であった（表７－５－10)。

また、自覚したきっかけ（複数回答）は「親から聞いた」が８人、「その他」が４人であり、その内容は、「トナカイ業の家に生まれサーミ語を使って育った」「自分がサーミだと自覚があった。誰からも言われることなしに」というものであった（表７－５－11)。

<M1>

記憶にないんですけれども、すごい若いころにそう（自分がサーミだと）認識しました。たぶん、７歳ぐらいかな。そのきっかけもよく今は覚えていないけれど、みんなで夏休みに行ったときかもしれないし、お父さんがしゃべったときかもしれないし。

<F1>

いろんなところで自分がサーミの代表者みたいに、みんなかなりエキゾチックっていうかな、(私を）そういうふうにしたがるんですよね。

表７－５－11　自分をサーミとして自覚したきっかけ(複数回答)

単位：人、％

親から聞いた	8	53.3%
親以外の家族・親戚から聞いた	1	6.7%
近所の人から聞いた	1	6.7%
友だちから指摘された	1	6.7%
学校の先生に指摘された	1	6.7%
身体的特徴に気づいた	0	0.0%
その他	4	26.7%
無回答	1	6.7%
非該当	2	13.3%

今後、どのように生活していきたいと考えているかについては、「サーミとして積極的に生きていきたい」が14人（93.3%）、「特に民族は意識せず生活したい」が１人（6.7%）であり、「極力サーミであることを知られずに生活したい」という者はいなかった。「サーミとして積極的に生きていきたい」と考える理由としては、次のような記述があった。

・自分はサーミで、サーミ語は自分のアイデンティティの一部だから
・次の世代に文化遺産を伝える
・子孫に伝えたい重要な文化。私自身の一生もサーミのトナカイ飼育の年間行事を反映し、トナカイとの生活はずっと私の人生の基盤になると思う
・自分がサーミなのだから、他にどのような生き方をするだろうか

また、「とくに民族は意識せず生活したい」と考える理由としては、「私は私。自分のアイデンティティがある。けれど自分が他の人と違うとは考えていない」というものであった。

<F2>
別に私がどうこう決めることではなくて、今私があるままの事実を受け入れて、生きていく。（サーミであることをあまり表に出さずに生活する人もいるが？）私の場合は、祖父母の代、（サーミ語が禁止されていた時代でも）うちではサーミ語をしゃべらないというのはなくて、いけないといわれてもしゃべっていたし、父方のお父さん、お父さんのほうにしても、私が産まれてから、家庭でサーミ語を実際に話すようになった。

<M1>
サーミとしてトナカイと一緒に生活していきたい。トナカイを一緒に助けてやっていくのがとても気に入っているので。ご飯をそれで食べていかないと。（トナカイの仕事をするというのが、基本的には自分の生きていく手段だというふうに感じているのか？）好きなことは好きなんですけれども、それだけが僕に似合っている職業だとは思っていないので、それもやってみたいと。ほかのチョイスもまだまだあると思うし。

サーミについて思うことに関する自由記述には、次のようなものがあった。

・サーミが風力発電、鉱山などの土地開発の際にもっと自分たちの意見を強く反映させることができるように願う。スウェーデンの鉱石法は最低。外国からどんな会社でもやってきて鉱石を探し、見つかれば鉱山の申請ができる。サーミは自然と生き自然を糧にしている。それが破壊され、失われてしまうと、何を糧にどうして生きてゆけようか？
・サーミ同士もっと意見の交換が必要。もっとHBTQ（ホモ、バイセクシュアル、トランス、クイア）の人々についても。サーミ議会でも互いに個人攻撃する代わりに、もっと政治を話し合うべきだ。

インタビュー対象者となった３人は、サーミについて思うことを次のように語っている。

<F2>

世の中にマイノリティーの人はいろいろいると思うのですけれども、私たちもその環境の、鉱山にしても電気、発電の会社にしても、いつでも土地について戦っていかなくてはいけないという事実があります。

（少数民族への対応について）スウェーデンは良いと思われているかもしれないけれども、実際はこのウェーデンのスタンダードからしたら、もっとできることがあるはずなのに、そのギャップというのが…（中略）ノルウェーは、なかでもすごくサーミの人とうまくやっている国だと思っている。一番いいかなと。（中略）でもノルウェーでちゃんとやっていることが、なんでスウェーデンでできないのかわからない。

<M1>

サーミの文化には、やっぱり言葉というのは重要なので、もっと言葉がいろんなところで学べるように。それにはやっぱり政府のバックアップが欠かせないと思う。

土地についても、自分たちがやってきた伝統的な生活の仕方ができるように、それを阻止するような人には影響を与えていきたいと。

自分たちで決めて、自分たちでエリアとかもきちっとやっていけたらいいなと思います。（サーミ議会については）いい仕事をしていますが、ちゃんと自分たちの仕事をしていないような感じがして、国の言いなりになっているような気がする。そこら辺を改善していかないと。（自分は）サーミの文化やトナカイ業も含めて衰退していっちゃって、それをきっちりもり立てていくような方向でいきたいと思います。

<F1>

私の次の時代、私に子どもが授かるかどうかもわからないし、いえないんだけど（中略）ここ（サーミ工芸学校のあるヨックモック）に来て思ったことは、姉も子どもが今できたところなんですけれども、ちゃんとサーミ語を話して、あやしたり、歌を歌ったりしているから、その子は、とても幸せなスタートをもっていると思う。

第７項　まとめ

本節では、サーミ工芸学校の学生の教育と意識をみてきた。調査から示唆されたことを概括すると、第１に、学生は、サーミ工芸学校に入学する以前から、サーミとしての文化的体験や生活経験など、私的なレベルでの教育的働きかけを受けており、サーミとしてのアイデンティティを有していること、第２に、サーミとしての誇りをもち、サーミの文化を「受け継ぐべきもの」という認識を醸成するためには、子ども期における周囲の教育的働きかけは不可欠であること、第３に、学校での学びは、サーミとしてのアイデンティティを進化させ、それをキャリアにするという意味で重視しているが、必ずしも仕事に直結させようと考えているわけではないということである。

これらのことから、サーミの若者がサーミ文化について専門的な教育を受けるということの意味は、サーミとして生きていくための「術」を手に入れることであると同時に、同世代のサーミとの交流などを通して、サーミとしての揺るぎない基盤があるという感覚（F1とM1が言う「マジョ

リティーとしての感覚」）を得る機会であると考えられる。もちろん、サーミ工芸学校での学びが、彼らの将来の仕事として成り立つようにしていくことは必要であるが、しかしそれ以前に、サーミとしてのアイデンティティをつねに肯定できる環境に身を置きながら、学ぶという経験そのものが重要である。だが、このような機会はサーミの誰もが経験しているわけではないと考えられる。そのため、本調査の対象となった若者が、サーミ工芸学校の入学に至るまでに経験してきたサーミとしての生活体験や周囲の教育的働きかけを、サーミの子どもや若者一般が享受できるようにすることが今後の課題である。

注

1）以下、法律の訳文は二文字（2011）による。ただし、二文字はサーミを「サーメ」と表記している。本節では他の表記に合わせ「サーミ」と修正している。

2）本項は2011年におこなったサーミ議会調査、サーミ学校長調査（野崎 2012：77-8参照）、2012年のサーミ工芸学校調査（本章第４節、第５節参照）と、サーミ教育局のホームページ（http://www.sameskolstyrelsen.se/）をもとに構成した。ただし、サーミ教育局のHPは2012年に大幅なリニューアルがおこなわれ、参照した記事については2013年２月現在で閲覧不可となっている。

3）これ以前より、スウェーデンはトナカイの遊牧をする者のみをサーミとして認定する政策を続けていた。1886年に作られたトナカイ飼育法では農耕などをはじめた者をサーミとして認定せず、トナカイサーミに与えられた狩猟や漁労の権利を与えなかったという（庄司 2005：68）。

4）サーミ工芸学校H教諭からの聞き取りによる。本章第４節参照。

5）本章第４・５節でもふれているように、C教諭が通ったサーミ工芸学校には、サーミ語のコースがある。そのため、このコースを履修したものと考えられる。

6）A教諭への聞き取りより。

7）北海道大学アイヌ・先住民族研究センター主催『アイヌ民族政策のこれから －アイヌ政策懇談会報告書を考える－』(2009年12月20日）での発言などから。

8）スウェーデンでは、小学校にあたる基礎学校に入学する前に、基礎学校の準備教育をおこなう６歳児学級へ１年間通うのが一般的である。第１節参照。

9）サーミ語を「話すこと」については「流暢に話せる」＝４点、「かなり話せる」＝３点、「簡単な内容なら話せる」＝２点、「ほとんど話せない」＝１点を与えた。同様の操作を「読むこと」「聞くこと」「書くこと」についておこない、各人の得点の平均値を本人のサーミ語能力得点とした。したがって、能力得点の取りうる範囲は１～４点である。なお、全体の能力得点の平均は3.1点、最低点は1.5点、最高点は4.0点（４人）である。

10）推計では、北欧とロシアに７万人いるサーミのうち、２万人がサーミ語を話すとされている。そのうち、16,000 ～ 18,000人は北サーミ語の話者であり、そのうちの5,000 ～ 6,000人がスウェーデンに住んでいる。それに対し、ルレ・サーミ語と南サーミ語の話者はそれぞれ600 ～ 800人程度である（Kvarfordt, Sikku and Teilus 2005：50）。

11）サーミ工芸学校の概要は、2011年8月に行った校長へのヒアリングから得られた情報にもとづいている。

参考文献

Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*（Minuit）.石井洋二郎訳，1990，『ディスタンクシオンI・II――社会的判断力批判』藤原書店.

Jansson, A., 2005, *Sami Language at Home and at School: A Fieldwork Perspective*（Uppsala University Library）.

Kvarfordt, K., Sikku, N. and Teilus, M., 2005, *The Sami- an Indigenous People in Sweden*（National Sami Information Centre）.

二文字理明編訳，2011,『ノーマライゼーション思想を源流とするスウェーデンの教育と福祉の法律』櫻井書店.

野崎剛毅，2012,「スウェーデンの先住民教育の現状と課題」『國學院大學北海道短期大学部紀要』29巻，71-84.

Solbakk, J. T. ed., 2006, *The Sámi People: A Handbook*（Davvi Girji OS）.

庄司博史，2005,「サーミ――先住民権をもとめて」原聖・庄司博史編『講座　世界の先住民族　ファースト・ピープルズの現在06　ヨーロッパ』明石書店，58-75.

山川亜古，2009,「先住民サーミの人々」村井誠人編著『スウェーデンを知るための60章』明石書店，61-7.

（第１・３・４節：野崎　剛毅、第２節：新藤　　慶、第５節：新藤こずえ）